
Great Wing

神威 遙樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Great Wing

【Nコード】

N3410X

【作者名】

神威 遙樹

【あらすじ】

SEED事変から三年後、グラールにはSEEDとの攻防の傷跡が未だ深く刻まれ、資源枯渇が深刻な問題となっていた。

外宇宙への移動を可能とする『亜空間航行理論』が提唱され、再興の道を外宇宙への大規模な移民計画に求めた。

三惑星の政府・軍・そして三惑星の企業は結束し、この『亜空間航行』の実現化へ向けて動き出していた。

『グラールの新しい未来』を願って――――

EP0: Prologue

母なる太陽と三つの惑星、パルム、ニューデイズ、モトウブを持つグラール太陽系。

そこにはヒューマンと、彼らから生まれたキャスト、ニューマン、ビーストという四つの種族が住んでいる。

全ての種族の根源たるヒューマンは環境適応能力に優れ、また心身のバランスが取れておりグラールで最も繁栄している種族。

三つの惑星どこにでも見られるが、特にパルムに最も多く暮らしている。

キャストはヒューマンに使役される目的として誕生した人口生命体だ。

しかし意思を持つキャストの誕生から人権問題が発生、独立闘争の末にパルムを管理するに至っている。

合理的な思考を持つ者が多く、一応機械だからか精密な動きが得意。

ニューマンはより高い能力を持ったヒューマンとして生み出された種族である。

耳が尖っているのが大きな特徴だ。

神経の反射速度や記憶力、精神力、思考力などはヒューマンの数倍という高い能力を持つが反面、肉体的能力ではヒューマンに劣る。

ニューデイズに多くが暮らしている。

ビーストは資源採掘による過酷な環境下での肉体労働の為に遺伝子操作された者達を祖先とする種族。

過酷な環境に適応する為に進化したので身体能力が高く、また親族意識が強い。

モトウブで多くが生活している。

そんな彼らはこのグラール太陽系の惑星上から宇宙空間にまで豊富に満ちている『フォトン』という粒子を利用して発展してきた。

フォトン粒子をフォトン・リアクターに取り込み、様々なエネルギー

ーとして使っているのである。

また、この『フォトン』はヒトの精神エネルギーに感応する性質があり、リアクターはその精神エネルギーにより出力の大小を変えたり、『テクニック』と呼ばれる技術を確立させた。

『テクニック』とはフォトンを触媒にして精神エネルギーで様々な超常現象を発生させる技術である。

かつてフォトン粒子が発見される前までは魔術だとか奇跡だとか言われていたが、れっきとした科学技術の一種だ。

今でも高度なモノは『魔術』と形容されたりはするが。

しかしその様にして自らの文明を発展させていった彼らは、突如として外宇宙から飛来してきた謎の生命体『SEED』による襲来を受け、滅亡の危機を迎えた。

けれども四つの種族は心を一つにして戦い、激しい攻防の末にこれを封印した。

これが世に言う『SEED事変』である。

それから三年後、グラールにはSEEDとの攻防の傷跡が未だ深く刻まれ、資源枯渇が深刻な問題となっていた。

外宇宙への移動を可能とする『亜空間航行理論』が提唱され、再興の道を外宇宙への大規模な移民計画に求めた。

三惑星の政府・軍・そして三惑星の企業は結束し、この『亜空間航行』の実現化へ向けて動き出していた。

『グラールの新しい未来』を願って――――

EP1：翼を抱いた少女

黒い広場にたくさんの人々が集い、陽気に会話をしている。

ここは海底レリクスと呼ばれる、その名の通り海底にある古代文明の遺跡。

黒い何かでできた遺跡は勿論壁も天井も黒く、しかし天井の一部などは海の青が透けて見え、壁や柱の一部も何故か青く光っている。

「これだけの人数が集まっているって事は、大手のスポンサーがついてるようだな。久々に儲けられそうだな」

広場に群がるヒト達を見て、一人の男が呟いた。

レリクスの壁と同じ、真っ黒のボディをしたキャストである。

ここはレリクス。

古代文明の遺跡であり、同時に非常に危険な場所である。

今この場にいる者達は殆ど全員どこかに属している傭兵。

今からこの場所を調査するのだ。勿論有償で。

腕を組み、黒いキャストは辺りを興味深げに見渡す。

するとこのキャストの目に一人の青年が留まった。

腰より少し上ぐらいまではあろうか、頭の上の部分はツンツン跳ねた真っ白の、男にしては長い髪を肩口でゴムヒモで一つに纏めた、右目には真っ黒の眼帯をした青年。

身を包む服は眼帯と同じく真っ黒のローブ。しかし所々鮮やかな色とりどりの糸で刺繍が施されていて、衣服に詳しく無い者でも高級品である事が分かる。

また、そのローブにせよ何にせよ、青年が身に付けている物に自らが所属する所を表す物が無い。

しかし身のこなしは軽く、迷い込んだ一般人でもなさそうだ。

「ほう、どうやらお前も傭兵のようだな。所属なしって事は、フリーか？ そりゃ大したもんだ」
「……？」

キャストがこの青年に歩み寄って話し掛ける。

すると青年が話し掛けられた事に対して、不思議そうに振り向いた。キャストは改めて青年の顔をマジマジと観察する。

今は突然話し掛けられたからか、少し驚いた感じだが、眼帯に隠されていない二重の左目は切れ長で鋭く、深い蒼色。

眉は細く、鼻や顔の形も整っている。切れ長の目のせいか少々目付きが悪いが、背も高いし女性にモテそうなイケメンだ。

「そう言うあんたも見た感じ所属なしだ。自分は強いって遠回しにアピールかい？」

「いやいや！ 俺はそんなつもりで言った訳じゃない。君はまだ若いのにフリーってのに驚いたから言っただけだ」

思いもよらない青年の返答にキャストは慌てて否定する。

普通まだ若い者は一度どこかに身を置くので、若いのに一人独立しているのが凄いのだと。

自分の様にそこそこ歳を重ねた者がフリーなのはとりわけ珍しくはないと。

「こっちも冗談だ。あんた『強そう』じゃなくて実際『強い』だろ？ そこら辺の奴とは動きが違うから」

青年はそう言ってニツと笑う。

慌てていたキャストはそれを見て一瞬動きが止まったが、すぐにあれがただの冗談だと理解して一緒に笑った。どうやら気が合うらしい。

一頻り二人は笑った後、周りを見回してまた話し始める。

「ま、場所が場所って事もあって腕利きを集めているのかもな。この海底レリクスはつい最近発見されたものだ。調査はまだ、殆どされていない。この辺りは安全なようだが……奥は、まさに『未開の地』ってわけよ」

「『未開の地』ねえ……カッケーな」

ここはつい最近発見された遺跡であり、キャストの彼が言った様にまだ未調査の場所。

何がどんな風になっているのかは謎であり、危険度も不明。故に、保険として腕利きを集めているのだろう。

しかし青年はそんな事よりも『未開の地』という言葉だけに反応。カッケーと言っただけ言っただけ面白そうに周りを見回すばかり。

「『未開の地』と聞いて不安にもならないか。面白い、君の名はなんだ？ 俺は――」

「シッ！ ……何か聞こえる。あと、名はギンだ」

ここは未知の領域なのに不安も恐怖も生じていないこの青年にキャストは興味が惹かれ、名を訊ね、また自らが名乗ろうとした。

が、それを青年が口元に人差し指を当てて制止した。自分の名を答えたので、キャストの話を聞いていなかったわけではないが。

青年はレリクスの奥へと続く道を静かに見つめる。

何かが聞こえる、そう言うのでキャストも耳をすませて聞いてみるが、彼の耳に入るのは周りの雑談のみ。

「帰ろ、帰ろうって！」

『何か』を聞こうとしていたキャストの耳に、この場には似合わ

ない声が入ってきた。

少女の声。

気になったので声の聞こえる方を見てみると、ピンクを基調とした服に身を包んだ金髪の少女が保護者らしき人物と何か揉めている。

「……なんだ、あの子供は？ 腕利きの傭兵のようにとはとても見えないが……」

腕利きどころか傭兵にも見えない。

それ以前に生まれてこのかた武器を持った事があるのかさえ怪しい。というか間違はなく戦闘経験は無いだろう。

場違いな子がいるものだ、そう思いながらキャストは再びギンの方を向く。のだが。

「……ギン？」

そこには既に誰もいない。

慌てて先ほど彼が見ていた奥へと続く道を見るが、やはりいない。まさかまさかのフライングスタートで更に奥まで行ったのか、それともただ周りをふらついてるだけなのか。願わくは後者であつてくれ。

そう思い周りを見回すが、やはりいない。

いや、誰かと重なって見えないだけかもしれない。

白髪は目立つ。

キャストが急いでその目立つ白髪を探しに動いた時に、それが起きた。

「ここ、レリクスでしょ？ 本気でヤバいんだって！」

金髪の少女が目の前の方に向かって力強く言う。

胸の前に両のこぶしを作り力説。

しかしながら男には届いていそうにない。

何故なら彼女の方を向いていないからだ。

「やだ、帰りたんだよ！」

「ったく、少しは働きやがれ！ ここは安全だから、今からおめえ用の仕事をもらってきてやる。うろうろしたりするなよ。いいか、ここにいろ！」

「……う……」

何も聞いてくれない相手に対し遂にはだだを捏ね始める少女だが、やっぱり何も通じない。

逆におもいきり怒鳴られてしまった。

押し黙った少女を見て男は更に言葉を続けてさっさと少女から離れていく。

少女はただその背中を見つめることしか出来ない。

「やっぱ……、やだ。ここ……やだよ」

男の剣幕に押し黙ってしまったが気持ちは変わらない。

彼女は感じるのだ、このレリクスの中に漂う何か気持ちの悪い気が重く、おぞましく、暗い気が。

気のせいとは言い切れない何か。

「ッ!？」

突然少女が頭を抱えて膝を着く。

苦しそうな呻き声が上げ、息が荒くなる。

するとそれに呼応する様にレリクスが揺れ始めた。

更には唯一の入口が誰も操作していないのに閉まり始める。

周りにいた者達はそれを見てパニックになり、外へ出るために一斉に入口へ殺到する。

「おい、何かマズイぞ！」

「逃げろ、閉じ込められる！」

「逃げ、脱出するんだ！」

いち早く入口に辿り着いた者達が叫び、奥にいた者達も慌てて走る。

ここは未開の地、何が起るか誰も知らない場所。そんな場所に閉じ込められるなんて冗談でも嫌だ。

我先にと走る者達の目には、頭を抱えて膝を着く少女など映っていない。

「ああ、ちよつと！？　ちよつと待ってよ！」

漸く頭痛が治まった少女が顔を上げると、周りには既に誰もおらず、入口付近に何人かいるだけ。しかも出るのに必死でこっちなど見ていない。

急いで少女も向かうが、間に合わない。目の前で無情にも閉まってしまった。

勿論、少女の力程度でどうにかなる貧弱な物ではない。

レリクスは完全に閉ざされた。

「どっからさっきのは聞こえたんだ？ 変にエコーがかかったから奥だと思ったんだが……って、ん？ 誰もいない？」

レリクスの奥へ繋がる道から白髪の青年が現れる。

何かしつくりとこない表情をし、やれやれと首を左右に振ってため息一つ。

しかし戻って見た広場の様子を見て、その微妙な表情が消えた。

誰もいない。それはもう、きれいさっぱり誰もいない。あれだけいたのに。わんさかいたのに。

調査始まっちゃった？

少し考えて、その結果あらぬ方向で思考が落ち着き、やっちゃったと青年はもう一度ため息をつく。

「出して、出してよー！ このっ、このやろっ！ 開きなさいよー！」

声が聞こえて青年がパッと入口を見れば、少女が一人。

閉じたドアを拳でガンガン拳で叩き、必死に何かを抗議中。

少女の背中を見ながら青年——ギンは顎に手を当ててのんびり考えた末に、思い出した。

彼女はさっきのキャストが何事かを言っていた子かと。

彼女も調査に置いてかれたのだろうか。駄々捏ねてたから置いてかれたか？

「……はあ。……だから帰ろうって言ったのにさ。ここはヤバいつて、あれだけ言ったのになんで聞いてくれないかなあ……」

彼女の方が自分よりは情報持ってそうだ。

ギンは取り敢えず声を掛けに何かを愚痴っている彼女に近づいてみる。

よくよく見ればこの線が細くて金の髪を一部頭の上で結い上げている少女、まだ相当若い。

……いや、幼いと言うべきか。

だがしかし、何かよく分からないが独特の『気配』がある。

何だろうか、懐かしくて温かいこの『気配』は？

「ちょっといいか？」

「……誰？」

肩をポンと叩いて声を掛けてみれば、思いの外素早い反応が返ってきた。

すなわち、肩を叩いた瞬間にはクルリとこちらを向き、目を鋭くする。……どうやら警戒しているらしい。

むやみに刺激したらいけないので取り敢えずギンは一歩下がって両手を上げる。

何もしないとの意思表示である。

「ああ、そっか。閉じ込められちゃったの、あたしだけじゃないんだね。何が起きたかって、分かる？」

「……『閉じ込められた』？ いやいや何が？ どういう事だ？」

ギンのアピールが通じてか、少女は目を柔らかくして肩を下げた。無害だと分かって警戒を解いたのである。

安心ついでに少女は何がどうなって自分達が閉じ込められてしまったのかギンに訊くが、閉じ込められたという自覚が無いギンは首を傾げて逆質問。

訳が分かってない。

「……分からないよね。あたしもいきなりで、それどころじゃなかったし。気が付いたらみんなは逃げ出してるし。……はあ、どうしたらいいんだろ」

「……」

ギンの反応だけ見て少女はやっぱりかと肩を竦めて一人で勝手に話を先に進める。

対してギンは少女の言葉の断片を集めて必死に現状を理解しようとしている。

閉じ込められた。自分と彼女。他は逃げた。原因不明。

……少ししてやっと分かったのか、ああと顔を上げたギン。

自分達は今閉じ込められているのだと漸く分かったのである。遅すぎると突っ込める者は今はいない。

そして更に考える。

レリクスは古代文明の謎の技術により建造された遺跡。

何もかもが謎だが、取り敢えず遙か昔から存在しており、なおかつ今も機能しているあたり、非常に強固であろう。

勿論破壊は出来まい。

故にこの目の前のドアを突き破って外へ脱出はまず不可能だ。

しかし、まさか遺跡の出入口が一つだけって事もあるまい。

取り敢えず奥へ進んで行ったらいくつかは出口ぐらいあるだろう。

気になる『音』もおそらく奥から響いていた。進む価値は多いにある。

ついでにクライアントの依頼、レリクス調査もしてやろう。

そこまで考えたらもう進むしかない。

ギンはすぐに奥へと足を向けた。

「どうしよう……って、まさか奥に進む気!？」

ドアの前で腕を組んで、打開策を考える少女が奥へと進もうとするギンに気が付いて驚きの声を上げた。

何度も言うがここは『未開の地』である。何がどんな風になっているのかなんて誰も知らない。

このグラール中に誰一人もいないのだ。
少女が驚くのは無理もない。

だが、興味という名の麻薬が頭の中で大量に分泌中のギンはさも当たり前かのように奥へと向かおうとしていた。
だから少女の声に首を再び傾げる。

「……進むが、それが何かマズイか？」

「無理無理！ やだやだ！ 危ないって！ ここ、未開のレリクスなんだよ？ すっごい危ないんだよ！？」

「やだって、誰も誘ってないが……」

一人で行こうとしていたのだが、いつの間にか一人増えていた。
というか彼女も自分と行動を共にする気だったのだろうか。

何故か拒否されたギンの首はますます斜めになる。

レリクスに閉じ込められたというこの非常事態なのだから、普通に考えれば同一行動が当たり前なのだが、いかんせんこのギンという青年はそういう一般的な考えとは全く違うところがある。

なんか拒否されたが、嫌なら一人で行こう、と少女にとっては情け容赦無い結論に至った。

「あっ……ちよっ、ちよっと待って！ 一人で行っちゃうの！？
行くから！ あたしも一緒に行く！」

情けも容赦も何も無いギンの行動に流石の少女も折れた。
一人で奥へ進もうとするギンの方へ慌てて駆け寄り、一緒に行くと

これまたギンにとっては勝手に宣言した。

何が起るか分からない場所で一人で過ごすより、誰かと一緒にいた方がいいに決まってる。

たとえばそれが何を考えているか分からない、白髪と眼帯の青年だろうともだ。

見た目だけなら怪しさだけしかないが、こういう時はその目立つルックスが意外と頼りありそうな気がする。

「あ、そういえば名前、聞いてないんだけど……」

「ギンだ。好きに呼んでくれ」

「……いや、それだけじゃ呼び方は固定されるよね。まあいいや。あんた、そういう名前なんだね。あ、あたしはエミリア。エミリア・パーシバル。えっと、その……これからしばらくは一緒だから………よ、よろしくね」

そう言って少女、エミリアがちよこんと頭を下げた。

ギンはそれを見て少し戸惑ったが、「おう」と一言だけ返して先に歩を進める。

早いと後ろで愚痴るエミリアを余所に、ギンは微笑みながら呟いた。今日は『初めて』が多いと。

広場から奥へと続いている道は細く、人二人が並んで歩くのが精一杯である。

ただ天井の一部が透け、陽光を浴びて青く光る海の明かりと、壁や柱の至る所が謎に青く光っているため暗くはない。

ギンの横にいるエミリアは不安そうに周りをひたすら見回しているが、今のところ何かいる気配は無い。

というか細い道なので壁だけ。

それから奥へと歩き始めてしばらくして、まだ少し遠いが道の先が開けて広場になっているのが確認できる様になった。

しかし何故か、その広場からは水が高い所から落ちる様な音が響き、また何かいる気配もする。

ギンはエミリアの方を向き、人差し指を唇に当てた。

エミリアは賢いらしい。

すぐに理解したのか、左手で口を押さえ、右手を前に突き出した。

すると右手周辺の空間が歪み、白い杖が現れる。

その様子をジッと眺めていたギンの目が止まった。

「へえ……相当な業物を持ってるんだな」

「へ？」

エミリアが持っている白い杖をジッと見てギンが言う。

真っ白い柄、先は何かの羽をあしらった芸術性の高い造り。

また、武器その物からも独特の力が溢れている。

一般的にはロッドと呼ばれる武器であるが、それらとは一線も二線も画す代物なのは間違いないだろう。

しかし所持者たるエミリアに自覚は無かったらしい。

ギンの言葉を聞いてまじまじと自分の右手にあるそれを見つめている。

「……気が付いたら持ってたんだ、これ。そんなに凄いやつなんだ」

へえー、と改めて色々な角度からそれを眺めるエミリア。

気が付いたら持っていた、などとかかなり怪しい事を言っていたが、どうやら本当にそうらしい。

ギンももう一度その白いロッドを見る。

……この武器が放つ気、かなり独特。おそらくは使用者を選ぶ。

武器その物に気に入られなければ触る事すら無理だろう。

この武器にせよエミリアにせよ、かなり独特な気を持った不思議なものだ。

「……さて、と。やるか」

「ああー、やっぱり原生生物がわんさかいる。見逃してくれたら、しないよねえ……」

二人は今いる細い通路から、そっと広場を覗き見る。

少し前までいた広場は正方形だったが、ここはそんな規則正しい形はしていない。

また、壁からは海水だろうか、ともかく天井から壁をつたって水が大量に流れ落ちており、広場を囲む様にある溝の中へ消えていく。

そんな広場にいるのは黄緑色の生物。

二足で歩き、両腕の先は刃の様に鋭く、顔は魚。しかもただの魚ではなく、牙が尖った鮫の様な顔だ。

それが三頭、広場の真ん中で妙に高い声を発しながらうろうろしている。

「……あの、えっと、えっとね。直前でこんな事言うのはなんだけど……あたし、武器は持っても、実は戦闘経験なんて殆ど無いの。……だから、頑張っ！あたしは応援してあげるから！」

いざ行かん、そんな雰囲気になった瞬間エミリアが気まずそうにそう言った。

原生生物に狙いを澄ましていたギンはいったん狙いを外してエミリアを見る。

……確かに、業物持つてるわりには体は華奢。勿論今まで修羅場潜って来ましたがなんて雰囲気も無し。

ギンはあるキャストがエミリアの事を何て言ったかまでは聞いてなかったが、おそらく場違いとかそこら辺だろうと思う。

……大当たりだ。

腕利きとかとんでもない。完全にド素人である。

ふむ、と少しギンは考えた後、パツといいことを思い付いた。

「三体いる。二体は俺が片付ける、残り一体は練習としてエミリア、お前の担当な」

「練習で!?! いやいや、相手本物の原生生物だよ!?! それにあ
たし戦闘経験とか無いから! ちよつとだけ『テクニク』使える
だけだから!」

ニコツと笑ってギンがエミリアに言うが、彼女にとってはそんな
笑って言われることではない。

明らかに死活問題。

相手は別に幻ではなく、真正銘本物の原生生物である。あの鎌み
たいな腕で切られたら非常にまずい。

しかしそれをギンは『練習』と言い切ってしまった。

この先何と戦わせるつもりか?

「心配するな、ヤバかったら俺がフォローするから。それじゃ行く
ぞ!」

「あ、ちよつと!?!」

焦るエミリアを見ながらも、ギンがやっぱりニコツとして安心し
ろと言い放つ。

絶対に安心とか無理なのだが、そんなもんギンは知らないし感じて
もない。いや、感じていても敢えて『練習』のために何もしない。
鬼の様だ。

ギンは後ろで焦るエミリアを置いて一気に駆け出し右手を出す。
すると、先程のエミリアと同じく右手の周囲の空間が歪んで何かの
柄が現れた。

灰色と赤を基調としたその柄をギンが握ると、柄の先の部分からオ
レンジ色の刃が出現して剣になる。

そこで漸く広場にいた三体の原生生物がギンに気が付き、甲高い鳴き声を上げながら威嚇を開始。

しかしそんなもんでギンは止まらない。

瞬く間に三体の中の一体との間合いを詰めて、剣を振るう。

輝くオレンジの刃が体を横に走り、そのまま原生生物は後ろに吹っ飛んだ。

更にギンはその近くいたもう一体にも斬りかかる。

流石に大人しくやられるにはいかないのだろう、鮫顔の原生生物は鋭い鎌の様な両腕を交差させて刃をガードする。

が、ガードが成功したのは初太刀まで。すぐに上から振り下ろされた二太刀目で真っ二つにされた。

これで二体終了と思ったが、最初に吹っ飛ばしたやつが生きていた。

シャツと荒い鳴き声を上げながら飛び掛ってくる。

しかしギンは慌てない。

自分も一步踏み出し間合いを詰めて、先に刃を左右に振るう。

刃がちょうど腰あたりを走り、あっさりと上下真っ二つになってしまった。

「すご……。うー、あたし戦闘経験なんて無いのに、上手く出来るかな?」

早くて華麗なギンの戦闘にエミリアは感嘆しながら広場に入る。

自分のノルマは残ってるこの一体。

あんな素早く華麗に二体倒せるなら残りも片付けてとエミリアは言いたい、のんびりギンは見てるだけ。

本当にヤバくならない限り手助けは無しらしい。

鬼めと叫びたい気持ちや不安を飲み込みロッドを構える。

……するとちょうど残りの一体と目が合った。

ギンは無理と判断したからか、それとも目が合ったからか、そいつ

はギンではなくエミリアに方に飛び掛かってくる。

「うそーっ!？」

なんでいきなりそんな間合いを詰めてくるのか。

落ち着いてゆっくり来いよ!

そう言いたくとも言えない。

咄嗟に後ろへ飛び退く。この時点で既に逃げ腰。

しかし一応はやるつもりらしい。

気合を入れてロッドに力を込める。すると先が赤く輝きだした。

そしてその先が赤く輝き始めたロッドを構えて、さっきまで自分のいた場所に着地した鮫顔に向かって振る。

すると赤くなっていたロッドの先が更に輝き、振った軌跡から多数の火炎球が飛ばされる。

それらがモロに直撃し、相手はよろける。しかしエミリアはそんな物見ていない。

ただ必死に、更にロッドを振って振って振りまくり、球を飛ばしまくり、鮫顔に向かって火炎球の嵐。気が付けば相手は丸焦げだった。

「な、なんとか倒せたね。はぁー、怖かった……」

「なんだ、経験無いとか言ってたくせにちゃんと戦えるじゃないか」

丸焦げになった相手を見て、ようやく胸に手を当ててホッと一息つくエミリア。

今自分は生きている。

なんか凄い幸せだ。

……倒し方はかなり酷かったが。もがく無抵抗な相手にひたすら火炎球を撃ち込むという。

そんな一安心なエミリアにギンが笑いながら声を掛けた。

戦闘経験ゼロとか言っているが、しっかりとテクニクは使えてい

る。

技術はあるらしい。

「あたしは必死よ！ ……ていうかあんた、強いのに凄い安物使ってるわね」

「は？ いやいや高かったぞ、これ。最近やっと買えたんだ」

必死よと笑うギンにアピールしたエミリア。

冗談ではなくマジで必死なのだ。

そんなエミリアが目をつけたのはギンの武器。

あれほど鮮やかな戦闘をするのに、物凄い安物を使っている。てっきり特別な何かを使ってると思っていたが。

しかしギンはそれにムツとして反論する。

いや、これは高かったと。

「まあ確かに重量が軽いからか切れ味はあまり無いが、高かったのは事実だ」

「武器だからそりゃ他の物に比べたら確かに高いけど……それGR^{ガル}Mで一番安いやつだよ？ あたしも持ってるし」

GRMとはグラール太陽系一の総合企業であり、軍の戦艦から小型武器まで幅広い軍事関係の物が特に得意。

ギンが持っているそれは、その一番安いやつである。

確かに武器である以上、そこら辺の雑貨よりはずっと高い。高いが、高級な家具なんかよりは安い。

一般人が護身用として買って持ち歩けるぐらいの値段ある。はつきり言えば武器にしては非常に安い。

しかしそんな値段の事よりもギンはエミリアの別な言葉に食いついた。

「お前も持ってるって、まさかお前どつかの令嬢か!？」

「だ・か・ら! 安いの!」

結局は値段の話であった。しかも何か変な勘違いまでされた。

そんな安物で『令嬢』の筈がない。

それならこの世の殆どは令嬢だ。

このギンという青年、いったいどんな生活を送ってきたのか分からないがかなり金銭感覚がズレている。思いつきり下に。

かなり貧しい生活を送っていたのか？

「ていうか、最近それ買ったんなら今まで何使ってたの？」

一番安い武器を最近買ったのなら、まさか今までは素手か、もしくは今回は傭兵稼業の初陣か。

しかし初陣があんな動き出来る筈がない。あれは間違いなく長年の技術の結晶、それこそSEED事変の真っ只中を腕っぷしだけで生き残ってきた様な動きである。

エミリアは戦闘なんかに詳しくはない。が、それでも分かるのだ。

こいつは他とは違う、と。

ならば今までその修羅場を何で潜ってきた？

しかも何故最近やっと買ったのが安物なのか？

謎だらけだ。

「今まではまあ色々とな。だが、やっと買ったこいつを今日から使ってる」

「……なんで？ こんな緊急事態だよ？ 使い慣れたやつ使った方がいいじゃん。持ってきてないの？」

「いや、あるぞ」

エミリアにはギンの行動が理解出来ない。

確かに新しく買った物は使いたくなるが、レリクスに閉じ込められるという緊急事態でそれを使うのか。

今までの使い慣れた武器の方が力を引き出せるので、生存率だって上がる筈なのに。

持ってきてないのならともかく、持ってきているのならなおさらだ。

「光る刃……これにロマンを、感じないか」

「……は……？」

エミリアの疑問にギンはフツと笑いながら答える。

答えるが、答えになってない。

いや、本人は完璧な答えのつもりだが、通じる筈がない。『ロマン』なんて久々に聞く言葉だ。

それに光る刃など、昔は不明だが今現在のグラールでは当たり前である。

これが珍しいなら確かに『ロマン』とやらがあるかもしれないが、珍しくもなんともない。

むしろ今はちゃんとした刀身が付いてる方が珍しく、希少価値や性能が高い。

案の定エミリアはポカーンとして固まっている。

「……それだけ？」

「『それだけ』って、感じないか？ 柄を握るところ、ブーンって刀身が出てくんだぞ？ しかも光ってんだぞ？ カッケーじゃねえか！」

「……いや、それはその柄の中にあるフォトン・リアクターがヒトの精神を感じ取って周りのフォトンで刀身を作るからだよ？ ……って、全然分かってなさそうだね」

「いや、分かる。要するに、『ロマン』だろ？」

「全然違う！」

ワケが分からないエミリアにギンは力説するが、何も受け取ってもらえない。

「それだけ？」と一言でバッサリ切られ終了。そりゃそうである。

対してエミリアはワケの分からない『ロマン』を熱く語るギンに丁寧はこの武器の仕組みを教えてやるが、こっちもこっちで意味不明な『ロマン』で片付けられてしまう。

もう一生これは理解しえないだろう。

せっかくの説明に意味がなかったのでエミリアはガックリ肩を落とした。

『ロマン』っておい。

「まあともかく俺はこれを使う。安心しろ、ちゃんとフォローはするから。奥行くぞ、出口だってきつとあるしな」

「出口！？ あ、そっか、出口って一つだけって限らないもんね。

……よし！ 行こっ！」

ただ闇雲に奥へ突き進んでいたわけではない。

『出口』という魅力的な言葉を聞いてエミリアのモチベーションは上がり、元気良く前へ歩き出す。

やる気が無いよりは有る方がいい。

意図してなかったが、これはこれで良かったとギンは一人で頷いた。ついさっきまでと違い、先にズンズン進むエミリアが前でギンを呼ぶ。

ギンは小さく笑い、軽く返事をして急いだ。

「か、かか……カッケー！」

「なに感動してんのよっ!？　これ完全にダメな状況だよ!？」

驚嘆の声を上げるギンに対し、エミリアはイラついた様な声を上げる。

目の前では赤いレーザーが何本も横に走り、進めない。

試しにと先程小さな石ころを投げてみると、レーザーに当たった途端真っ二つに見事に切られた。ヒトが通ってもそうなるのは明らかだろう。

頭を抱えるエミリア。

これは完全に手詰まりである。

スイッチなんてどこにもない。……当たり前だがそんな物ある筈無い。

「今まで分かれ道なんていっぱいあったから、別の道行くしかないね」

「いや、こっち来いエミリア」

「なに？　……って、ちよっと!？」

仕方ないため息混じりにエミリアが諦める。

ここに来るまでに相当歩いた。鮫顔とも嫌々何度か戦った。殆どギンが倒したが、一回の交戦のうち一体は倒したし。

そして今まで歩いてきた道のりにたくさんあった分かれ道を、適当に選んでこのルートに来たのだ。少し戻って別の道を選ぶのがいいに決まっている。

このどうしようもないレーザーにずっと構っている程暇では無いのだ。

しかしそんなエミリアとは違い、今までレーザーを見て目を輝かせていたギンは別の判断を下した。

エミリアを側に呼ぶと、しゃがんでエミリアを持ち上げる。俗に言うお姫様抱っこで。

「ちよっ、えっ!?! 何するつもり!?!」

「このレーザーって上までねえだろ? 飛び越える」

「はあっ!?! 無理無理、絶対無理! 凄い高いもん!」

確かに壁から壁へと横に幾本も走るレーザーは、天井付近までは無い。

目測でおおよそ1メートル、それが一番上を走るレーザーと天井の隙間の幅である。

しかしその隙間を通る為には、これまた目測でおおよそ5メートル程跳ばなければならぬ。普通に考えれば無理だ。

一部のビーストやキャストならいけるかもしれないが、エミリアはヒューマン、勿論ギンもそうだろう。

身体能力が並みの『ヒューマン』という種族で、道具も何も無しで跳躍5メートルは不可能に近い。

「ジタバタするな、胸が当たる」

「ッ!?!」

「……勿論ウソだがな!」

エミリアはギンにお姫様だっこされたままジタバタもがく。ここでレーザーにバラバラにされるのは御免だから。

死にたくないのだ、要は。当たり前である。

そんなもがくエミリアに対してギンが困った顔をしながら物凄い事を言い放った。

これが効果抜群だったらしく、物の見事にエミリアの動きが停止する。顔は真っ赤で、両腕で自分を抱き締めたのは反射である。物凄い事言われたから。

これもまた、当たり前。

バッチリ動きが止まったエミリアに向かってギンはクスツと笑いながらウソだと言って、地面を蹴り上げる。

……助走も何も無し、ただの垂直跳びでレーザーを越えて隙間を潜り、向こう側へと見事に着地。

ウソだの何だの言われて固まっていたエミリアは、今度はギンの常人離れした身体能力を見て固まった。

「うわあ、すごつ。……って、そうじゃない！ あ、あんた、いきなり何言うのよ！ ビックリしたじゃない！？」

固まっていたエミリアだが、先程のギンの言葉を忘れはしない。再びジタバタともがいて抗議する。

ギンはやれやれと首を左右に振りながら、エミリアをソツと優しく地面に降ろして立たせた。

そして呆れた様に一言。

「暴れられちゃ空中でバランス取れねえからな。……それに、当たる程お前胸無えぞ」

女性に言うてはいけない最高にデリカシーの無い言葉。

それを情け容赦無くギンはエミリアに言い放った。

プツンと何かが切れる音がして、エミリアの顔に怒りが広がる。

自分の言った事がどれほど失礼なのか自覚無しのギン、さー進むか、なんて言っただけのんびり歩き出し、エミリアの様子なんて知ったことじゃない。

……レリクスに鈍い音が響いた。

「……………すまない、俺が全面的に悪かった。もう二度と言わないとありとあらゆるものに誓うから、許してはくれないか？」

右手で顎を擦りながら、涙目のギンが肩を揺らしながら前を歩く
エミリアに懇願する。

最高にドギツイ一撃を喰らったギンは謝るしかないのだ。

エミリアとギンの身長差から、エミリアはギンに拳骨をするのは
不可能であった。だからエミリアは考えたのだ、鉄拳制裁はアッパ
ーにしよう。

前を歩こうとしていたギンを呼び、振り向いた瞬間最高の右を顎の
下から振り上げる。

戦闘経験皆無のエミリアの、現時点での最高最強の一撃は鮫顔生物
ではなくギンの顎へ入ったのだった。

その一撃は効いた。

めちゃくちゃ効いた。

ギンは本気で誓ったのだ、女性に対する発言には気を付けてようと。
ミスれば命が危ないから。

心の底からの謝罪の言葉を聞いてエミリアは一つため息を吐き、
クルリと振り返ってギンの方を向く。

「以後、気を付けるように！」

「……天に誓って」

これにて取り敢えずギンは許された。ホッと一息である。

ギンは一息つきながらチラリとエミリアの表情を確認。

目などから判断するに、本気で許してくれた様だ。目尻が先程より
も少し下がっているから。

ここで再度、ギンはホッと息を吐く。

そんなギンの様子を眺めながら、エミリアは改めてギンの姿を見
る。

種族は間違いなくヒューマンであろう。耳が尖ってなく、また動物
的でもないのでニューマンでもビーストでもないのは間違い無いか

らだ。キャストなら見て一緒に分かる。

着ている漆黒のローブには所々、色鮮やかで見事な刺繍が施されており、刺繍の紋様は詳しく何なのかは分からないが、花や雪の結晶、星などの自然物をあしらっている様に見える。

高級品で間違いは無いだろう。

しかし安物セイバー一本すら今まで買えなかったと言い、身なりと矛盾が生じている。

この青年は何者なのだろうか？

「ねえ、あんたって――」

「！」

エミリアがギンについて尋ねようとしたその時、ギンが何かにピクリと反応した。

そして右手に剣^{セイバー}を出してそれをぶん投げる。ちょうどエミリアの顔の右側を掠めて飛んでいき、何か機械に突き刺さる様な音と何かが床に落ちる音、ついで爆発音の様なものが後ろから聞こえてきた。

恐る恐るエミリアが振り返った先には、セイバー何かに突き刺さり、それが煙を上げて地面に横たわっている。

近づいてみると、それは腰が曲がってエビの様に見えなくもない機械である事が確認出来る。

「いきなりこいつが後ろから出てきてな。ビックリさせて悪かった」

「うん……大丈夫。守ってくれたんでしょ？」

煙を上げているそれをエミリアが見ていると、後ろからギンが頭に手をやりながら声を掛ける。

投げたセイバーがエミリアの顔に掠めた事を気にしているらしい。確かにちよつとビックリはしたが、別に怪我也何も無いのでエミリアは気にしないでニコツと笑って返す。

ギンはそれを見てあからさまにホツとして、それに突き刺さったセイバーを引き抜いた。

「……これはなんだ？ 明らかに機械で原生生物じゃねえが、意思みたいなもん持つてる様に見えたぞ？」

「スタティリア自律起動兵器だよ。旧文明の人がレリクスを守る為に造ったね。意思じゃなくてプログラムだよ、わたしたち侵入者を消すっていう明確な目的」

スタティリアはこのグラールにあるレリクスに必ず存在する兵器だ。

今はもう主のいないレリクスで侵入者を消すというプログラムを確実に遂行しようと動いている。

機械ではあるが単純な攻撃だけではなく、相手の攻撃回避や防御、攻撃手段を変えたりと戦況に応じて行動を変える。旧文明の技術力の高さが伺える物だ。

ギンは自身が破壊した煙を上げるスタティリアをまじまじと、興味深げに見つめる。

「俺はそういうのには疎いんだが、こんな奴らでも魔術テクニクは使えるのか？」

「まあ理論上はね。でもこいつは使えないよ？ なんで？」

「こいつ浮いてたし、奥にいるのが今まさに使ってきたからな！」
「うえっ!？」

ギンの言葉に反応してエミリアが素早く顔を上げる。

確かに道の先には何か丸っこい奴がおり、そいつが今まさに球状の物を放ってきたところであった。

しかしギンは揺るがない。

冷静に飛んで球をセイバー……ではなくて何も持っていない左手を掲げてそれを上に振り上げる。

すると氷の壁が現れて球を防いだ。更にその壁は球を防いだ後すぐに消え、それと合わせる様にギンは右手のセイバーを真横一文字に振るう。

まだ相手と距離はある。が、見えない斬撃がセイバーから飛び、それが丸っこい奴を真っ二つにした。

「……すごい。さすが傭兵って感じ」

美技とはまさにこの事か。

近距離武器のセイバーなのに、遠距離にいる相手当真っ二つ。

自分とは格も次元も違うとエミリアは感心する。

のだが、一つだけ気になる事があった。

「てかなんであんた、ウォンドもロッドも使わないでテクニックに使えるのよ？」

「……誰でも使えんじゃねえか」

「少しはね。でもあんなの無理！ あんなの普通に使えたらウォンドもロッドも要らないよ！」

『ヒト』は誰でも必ず、練習すればテクニックが使える。

道具無しでも使えると言えれば使えるが、どんな達人でも非常に小規模なものぐらいしか出来ない。それぐらいテクニックは難しいものである。たとえ四つの種族のうち、最もテクニックが得意なニューマンでもだ。

故に片手杖や杖ウォンドの様な増幅装置ロッドを使って強力なテクニックを扱うのだ。

しかしこのギンとかいう青年は何も無しで氷壁を作るテクニックをやってみせた。『ヒト』ならば普通あり得ないのだがやったのだ。ますます何者なのか？

「俺だつてロッドとかないと一瞬だけだ。すぐ消えたら、壁？」

「そういう風にしたんじゃないの？」

「一瞬しか保^もたないのを分かつてるから、ああやった連携が出来るだけだ」

ギンはそう言うがエミリアは釈然としない。

たとえ一瞬だけだとしても、それでも普通じゃあり得ない。

ただの壁ではない。相手の攻撃を防げる程の強度がある壁だ。

それにあの片手剣^{セイバー}の飛ぶ斬撃も見逃せない。

あれはなんなのか？

「じゃあ飛ぶ斬撃は？ あれだつてテクニックじゃん！」

「『フォトンアーツ』っていうやつだ。傭兵なら誰でも使える。それよりもこれ見ろ」

「本当？ ……うえ、何こいつ気持ち悪っ！ 初めて見た。……夢に出そう」

まだまだギンの言葉に納得しないエミリア。

しかし傭兵の戦闘なんて今回のギンの戦闘以外見たことも無いので否定する事も出来ない。

これ以上エミリアからの質問攻めにあうのもギンは嫌なので、無理矢理話題を変えていく。

つまるところ、たった今ぶった切ったスタティリアなる兵器の中の構造を見せる。

納得がいかないながらもエミリアはスタティリアの断面を見てくれた。

……すぐに顔をしかめたが。

「中身はただの機械でカッターじゃねえか、何が気持ち悪いんだ？」

「外見よ外見！」

断面を見れば何やら複雑な機械だが、成程外見は確かに綺麗ではない。

クリーム色がかった丸っこい体には何やらトゲか角か知らないが、ともかくツンツンしている。四本の足は短く体のトゲトゲが少し長くなった様な形で、不恰好。

女の子たるエミリアに気持ち悪いと言われても仕方ないか。

男たるギンにはいまいち分からないのだが。

事実首を傾げている。

「……なんか、ちょっとホツとしたよ。あんたがいれば、安全っぽいしさ」

真っ二つになったスタティリアを後にして歩き出して直ぐ、エミリアがポツリと呟いた。

何も無しでテクニク使ったりと何やら怪しい感じは拭いきれないが、それでもこの強さは信用出来る。

それに、悪い奴でも無い。

まだ短い時間だが、それでも一緒にいてそれぐらいは分かると。

ギンは思いがけないその言葉に上手い返事が思い付かず、何も言えない。

「あたしは軍事会社に登録されてるだけで、戦う気とか、これっぽっちも無かったのに……。だっていうのに、あのおっさん。あたしが働かないからって、ムリやり連れ出してこんな危険なレリクスにほっぽって……。あー、なんか段々ハラが立ってきた！　こんなか弱い女の子を、一人にするなんてひどいと思わない？」

「……まあ確かにな」

何かフラストレーションが溜まっていたのか、いきなり怒りだす

エミリア。

ギンとしてはエミリアが軍事会社に登録されているというのは初耳で、それが驚きなのだがそんな事言っても意味がない。

この突然怒りだしたエミリアに同調しないと面倒臭そうなので、取り敢えずエミリアの問い掛けには頷いてやり過ごす。

それに戦闘経験ゼロのエミリアをほっぽり出しているのは事実。これで怒らない奴はいないだろう、エミリアは正しい。

「でしょ？ やっぱりそうだよね！ 確かにあたしも、仕事を選び好みしてなんにもやってなかったけど……いきなりこれはひどいもんね！」

同調してもらったのが嬉しいのか、エミリアは気分を良くして更に続ける。

……のだが、自ら墓穴を掘った。

ギンの顔が微妙になる。

選り好みしてサボりまくっていたら無理矢理仕事に連れて来られるだろうし、この事態も普段の行いのバチではないのだろうか？

という事はギンはその『バチ』のとばっちるか。

そりゃ微妙な顔にもなる。

これはもうバチだと。

「……ん、どうしたの？ そんな微妙そうな顔して？」

「……いや、なんでもない」

しかしエミリアはそんなのに気付いていない。

一頻り『おっさん』なる人物の悪態をつきまくり、スッキリしたところで微妙な顔のギンを見て首を傾げる。

ギンはギンで「原因はエミリアの普段の行い」なんて言える筈も無く、何とも言えない顔で「なんでもない」と言うのが精一杯である。

ここでエミリアを怒らすのは百害あって一利無し。
実際は百害も無いが、一利も無いのは確かである。

「とにかく、あんたがいれば無事に帰れるような気もするし、おっさんには後で文句言いまくってやる。『SEED』はもう存在しないからレリクスは安全だ、とか言い張ってあたしの言う事信じてくれないしさ……。そりゃ、今まで発見されていたレリクスはSEED襲来があったときばかりに機能を覚醒させていたよ？ でも、全部が全部そうだったかって言うと、そういうわけじゃなかったんだよね。一説によると、SEEDの散布する素粒子に反応して起動してるみたい。だけど、同時に磁場の乱れも観測されるからどうもそれだけじゃないと思うのよね。そもそもSEEDは3年前に一掃された筈なのに、こうしてレリクスは起動してるわけでしょ。レリクス自体が何らかのプログラム管理である以上はトリガーとなる物、それに準じた……」

何かのスイッチが入ったのか、エミリアは更にヒートアップする。
ギンの微妙な顔も効いていない。

ギンしか周りにいないのをいいことに、持論を展開してしゃべくり倒す。

だが、残念ながらギンは全く分かっていない。

頭の上でクエスチョンマークが飛び交い、終いには話を聞いているだけで眠くなってきたのか、コクリコクリと舟を漕ぎ始める始末。

難しい事を聞くと眠くなるらしい。

子供の様だ。

難解な言葉の羅列が子守唄へと早変わりなのである。

舟を漕ぎ、足もフラついてきている。

もう限界だ。

「すまないが、もういいか？」

「……あ。え……ええつとー……」

熱弁を振るうエミリアにギンは堪らず、落ちかけの意識を必死に維持して声を掛ける。

もはや言ってる事の意味が分からないので仕方がない。
今ギンは眠気を必死に抑えてフラついているのだから。

声を掛けられ漸くエミリアは我に返った。

少しバツの悪そうな、申し訳なさそうな表情をしてギンを見る。

……未だに睡魔と交戦中だが。

眉間に指を当てて眠気覚ましに必死である。

「……俺はよく分からなかったが、詳しいな」

「あ、いや……こ、このくらい常識でしょ？ 常識！ 常識だって！
傭兵だったら誰だってこれぐらい知ってて当然なの！」

やっとこさ睡魔を撃退したギンがエミリアに笑い掛けて言う。

対してエミリアはバツの悪そうな表情を崩さずにそう言い放ってソッポを向いた。

かなり深いところまで話していたが、自分の持っている知識にあまり良いイメージが無いのだろうか？

少なくとも、本当は一般人やそこらの傭兵は知らない知識である。

ギンはギンで常識が無いらしく、エミリアの言葉を間に受けてはあど感心した様に頷いた。

「傭兵っても賢いんだな。俺はそういうのには疎くてな……常識を知らないんだ」

自虐的にギンは笑い、そうかそうかと何度も頷く。

エミリアの目にはそれが何か凄く寂しそうに映り、目を逸らす。
そしてぶっきらぼうに言葉を吐いた。

「いい、今の説明は忘れて。どうせあたしが何言ったって、誰も信じてくれないんだし！」

吐き捨てた様なその言葉にギンの動きがピクリと止まる。

ソップを向いたエミリアをジッと見つめ、不思議そうに首を傾げた。眼帯に隠れていない左目のは眉が吊り上がり、瞳は疑問で溢れ返っている。

「何言ってたんだ、俺は信じるぞ？」

「え……？ 信じて……くれるの？ ……って、こんな世話してる場合じゃない！ もう、いいから先に進もう！」

ギンの言葉に今度はエミリアがピクリと反応した。

勢いよく振り返り、ギンの目を真っ直ぐ見つめる。

が、直ぐに照れ臭くなったのか、それとも別の感情か、ともかく再びソップを向き直してそう言い、前に歩き出す。

ギンはそんなエミリアの反応を不思議そうに見つめるが、深追いはせずにゆっくりと従って自分も歩き出した。

いつの間にか歩く前後や立場が逆転していた。

それから数十分は歩いただろうか、二人は大きな広場へと出た。

円形のそこは今まで通ってきたどこの場所よりも広く、天井が高く、奥に一つの通路が見える以外は壁しかない。

……いや、ちょうど広場の真ん中辺りの壁際に五体の大きな何かが突っ立っている。

ステイリアである事は間違いないが動く気配も無く、ただ突っ立っているだけ。逆にその静かさが不気味である。

「ずいぶん奥まったところまで来たけど、まだ出口見つからないの

「？」

円形の広場をグルリと見回しながらエミリアがぼやく。

途中でスタティリアが目に入り渋い顔をしたのはご愛嬌だ。

今まで相当歩き、また、何度もあの鮫顔や丸っこかったりエビみた
いだったりするスタティリアなんかとも戦闘を繰り返してきた。

今まで戦闘経験が無かったエミリアに疲労が溜まっているのは当たり前である。

エミリアはよく頑張っている。

だからこそあんな無意味にデカイ奴とは戦いたくない。

「つつてもなあ……。まあそのうち見つかんだろ」

「そのうちじゃ困るの！ それにこの周りに見えてるのって、全部、
大型の自律機動兵器だよ。ただでさえこっち見てて怖いのに、もし
動き出したらって考えると……。ねえ、早く行こうよ」

「……カッケーのになあ」

計五体ある大型のスタティリア。

そのうち一体をボケーツと眺めながらギンが適当に言葉を返す。

灰色がかった巨体はヒト型。

肩から丸いパッドか何か分からないが、ともかく丸い何かが付いて
いる。

意外と手足は細い。

更には何を血迷ったのか右手には巨大な斧をまで持っている。でか
いだけで十分強そうなのに。

そんな大型で人型のスタティリアを眺めながら、焦っても焦らなく
ても一緒だからと、これまた適当に続けた。

しかしエミリアはそんな余裕なんて無い。

疲労もある、この緊急事態のせいですと緊張しっぱなし、神経も
相当すり減らしている。

何よりも、人生初体験の『戦闘』という行為（しかも複数回）が彼女のスタミナや気力などの『体を進ませるモノ』を殆ど全てかつさ
らっており、限界に近いのは不可抗力というやつだ。

現在目の前にある、動かないけどでかくてゴツイステイリアもエミリアのスタミナを削るのに一役買っている。いつそ動けばギンが処理するのに、と。

エミリアの急かす声にギンは残念そうな声を上げるが、それでも従う。

エミリアとギンの戦闘経験の差は星の数程あり、ギン自身のスタミナは余裕。

しかしその圧倒的な経験量からギンは気付いているのだ、エミリアの状態を。

ただギンがあからさまに心配すれば余計にエミリアも不安になって、余計に体力を使う。

心配していてもそれを表情や動作には出さないだけである。

「何度も悪いが回復魔術でケアしといてくれ。俺もお前に使ってもらいたい、補助魔術が苦手な。我ながら情けない」

「分かっている。……てか、あんたにも苦手な事があるんだねー、意外」

補助が苦手と自嘲するギンに、エミリアは苦手なものがあるんだと本当に意外そうな顔をした。

エミリアは自分をいったいどういう風に見てるのかギンは疑問に思う。

ヒトなんだから苦手なもの一つや二つはある。

体力のあまりないエミリアが今までどうしてへばらずにここまで来れたかと言うと、ことあるごとにレスタを使っていたからである。そうでなければ、とっくの昔にロッドを振り回すエミリアの腕や歩き回った脚が音を上げて倒れている。

レスタで無理矢理、表面上だけ回復させているのだ。
勿論の事ながら体には悪い。本来ならばゆっくりじっくり回復させるべきなのだから。

いくらレスタといえど痛みや疲れを全ては取り除けない。

エミリアはロッドを取り出して目を瞑る。

するとロッドの先が緑色の光を放ち始め、輝きが増した瞬間それを振る。

緑の光がエミリアを包み、彼女の顔から幾分か疲れの色が取れた。
幸運な事にエミリアは補助系統の魔術が得意らしい。

今日初めて使ったわけではないと本人は言っていたが、それでもギンには分かる。『回復』という繊細な魔術テクニックをまるで『攻撃』と同じ様に澄ました顔でやってのけるのだから。

「ほら、レスタ使ったし行くよ！ こいつらが動き出したら――」

疲れが少しとれたからか、さっきよりも張った声でエミリアはギンに奥に進むよう声を掛け……ている途中にそれが起きた。

すなわち、突っ立っていたスタティリアの五体のうち一体がいきなり音を立てて動き始めたのだ。

スタティリアは巨体を揺らし一歩進む。

重く鈍い音が広場に響き、少しかり周りが揺れる。

エミリアの血の気が引いたのは言うまでもない。

ギンはギンで、さっきまでは興味本意で動いたら面白いなーとか思っていたが、実際に動いたら面倒この上無い。

何せエミリアの限界は近い、というか既に越えてる。

無理矢理なドーピングでなんとかなってる状態だ。

これは本当にヤバイ。不幸中の幸いは、五体のうち一体だけしか動いていないという事か。

「……ちよつ、じよ、冗談でしょ!？」

言ったそばから動き始めな

いでよ!」

エミリアが悲鳴の様な声を上げる。

当たり前だ、最も嫌な事が起きたのだから。

動くなと願っていたモノが動いたのだから嫌に決まってるし、頭を抱えるのも仕方ない。

動き始めたからだろうか、ただ突っ立っていた時とは見た目が少し変わっている。

ボディの色は動いていない時は灰色一色だったが、いざ動き始めれば白もある。

というか白地に灰色か。

それにフォトンが体を流れているせいかな少し光っている。

「取り乱すなエミリア! ……大丈夫だ」

焦って一人でてんやわんやしているエミリアをギンが何時いつに無く

強い口調で制止する。

ギンの声に気圧されたのかエミリアがピタリと止まった。

大丈夫だ、そうギンはゆっくり言って頷いてみせる。

しかしエミリアは動きは止まったものの困惑した表情は崩さない。

「大丈夫……って、まさかあいつと戦う気!？」

不安で揺れた目でギンを見つめ、震える声で言う。

信じられない、言葉にしてはいないがそう思っているのは明らかだ。しかしギンは、それでも揺るがない。

何故ならば選択肢がもうそれしか無いからである。

他に何かあるならば、それがよほどのギャンブルじゃなければとつくにそれを取っている。

エミリアの体の状態を理解しているのだから。

「俺らが入ってきた道も、奥に見えてた道も閉まってんだ。……悪いが、これしかない」

ギンのその言葉を聞いた瞬間エミリアは勢いよく振り返って自分達が入ってきた場所を見る。

確かに閉まっている。入った時には扉なんて見当たらなかったが、確かに閉まっている。唯一あった奥へと続く道も同様だ。

エミリアはもう一度ギンを見つめる。

「……うー、うううーっ！ わかったよ、あたしも覚悟決める！ その『大丈夫』って言葉……信じるからね！！」

確かにもう戦うしかない、認めたくないが。

エミリアは少しの間だけ両腕で頭を抱え体を丸めたが、すぐに頭を抱えていた両腕をおもいきり振り上げて、自棄^{やけ}だが覚悟を決める。『窮鼠、猫を噛む』という言葉通り、噛んでやろうと。

右手を持ち上げてロッドを出し、構える。

今まで戦ったステイリアとはサイズが違う。

自分のテクニクが効くのかは分からないが、それでも対峙した。ギンを信じて。

「俺が攻める、エミリアは遠距離からテクニクでフォローを頼む！ 残りが動き出すかもしれないからそこには注意払っとけよ！」

「うん、分かった！」

「……！？ あのバカっ！」

ギンの指示が飛び、エミリアは後ろに走り出す。……背中を向けて。

最大の死角を相手に見せて下がるとは、まさに自滅行為。

相手がそれを見逃す筈も無く、手に持った巨大な斧を振りかぶった。戦闘慣れしていないとはいえまさかこんな初歩的なミスを犯すとは。ギンは思わず悪態を吐いて地面を蹴る。

振りかぶった斧が降ろされるのよりもギンの加速の方が速く、瞬間に間合いを詰めたギンは跳ぶ。右手にセイバーを取り出し、スタティリアの斧を持って振り上げられている右手を狙い、まさに振り降ろされる瞬間にその右手をセイバーで強襲。

振り降ろされる瞬間は意識も力もそこに集中する。そこへの強襲は威力狙いではなく、バランスを崩すこと。

セイバーを振り切った瞬間、鈍い音がして見事にスタティリアがよろけた。

巨体は土台には都合が良い。ギンはそのまま相手の腕を蹴ってまた跳躍、クルクルと回転しながらスタティリアの広い間合いから抜け出し、地面へ着地。目線はスタティリアから外してはいない。

「相手に背中を見せるな！ 自分の視界から相手を外すな！ 死ぬぞ！」

「ご、ごめん……」

絶対にやってはいけないミスをしたエミリアに、流石のギンも声が荒くなる。

エミリアも自分がやってしまった事が如何にヤバイ事なのか分かってるのか、素直に謝る。

背中では最大の死角、ヒトの視界は360°も無い。

だからこそ今もギンはエミリアを叱っているながらもエミリアを見ていない。

スタティリアから視線を外さず、機械相手に効くのかは分からないが牽制をしているのだ。

気配で相手のおおよその位置を読めたとしても、過信してはいけない。基本は目である。

ギンの強襲を受けてよろけていたスタティリアは直ぐに体勢を立て直し、斧を構えて止まっている。

ギンの牽制が効いているのか、それとも何か狙っているのか。少なくとも残り四体が動き出す気配は無いが。

と、いきなりスタティリアは膝を曲げる。

そして跳躍。先ほどのギンとは違い横方向ではなく縦方向へのベクトルが強い。

そのまま空中で今度こそ斧を大きく振りかぶった。

「あ、あの質量でこんなに跳ぶの！？ 反則よ！」

「いいから退け！」

思わぬ大ジャンプにエミリアが驚嘆の声を上げる。

巨体に似合わぬ脚力をあの細足で持ち合わせているとは恐ろしい。意外に機動力はある。

ギンの指示にエミリアは素直に従い、今度はしっかりと視界にスタティリアを入れながら後ろへ下がる。

あの斧に何かの能力が付加されているかもしれないし、テクニクやギンの言う『フォトンアーツ』なるものをしてくるかもしれない。距離があっても油断は出来ないのだ。

ギンはエミリアに指示を飛ばした後、自身は後ろへ下がらずにその場に留まる。

それに気付いたエミリアが驚きの表情と共にギンの名を呼ぶ。

人に下がれと言ったときながら自分は何してんの、と。

「……微妙に空中で補正してるな。スゲー」

エミリアの声が届いているのかいないのか、ギンはその場でジッと上を見上げたまま。

動きといえば右手に掴んでいたセイバーを左手に持ち代えただけ。

狙いが分らない。

思ったよりも長い滞空時間だったが、遂にスタティリアが落ちてくる。

振り上げていた斧を落下に合わせて降り下ろし、威力を更に高めながら。

と、ギンはその瞬間勢い良く地面を蹴り、先ほどのスタティリアのように真上へ跳ぶ。

迫る斧をクルリと避け、相手の懐に入り込んで剣を右から左へ横に振る。

鈍い音が響いたが、こいつの体勢は崩れない。

全然効いてなさそうな相手を見てギンは一つ舌打ちし、体を捻って落ちてくるスタティリアを躲す。

スタティリアはギンの攻撃なんてなんのその、そのまま巨大な斧を降り下ろし地面を叩き割った。

叩き割るだけで別にテクニクも何もしていないが、エミリアを脅すには十分。

地面を叩き割った時に隙が生まれたがエミリアは顔を引きつらせたまま動かない。

相手の後ろに着地したギンはやっぱりかともう一度舌打ちした。

「呑まれるな、動け！ 狙われるぞ！」

ギンの檄でエミリアはビクツと体を揺らして反応し、ハッと動き始める。

……背中を見せて。

その絶好の攻撃チャンスが相手が見逃す筈も無い。

地面を叩き割った斧の先をそのまま地面に付けて、ちょうどモップで床を拭く様に体勢になる。

斧の先が光り出し、派手な音を立てて雷が発生した。

くらったなら洒落にならないだろう。

スタティリアが走りだす。雷撃付きの斧を地面の上で滑らせながら。しかも意外と早い。

物凄い音が立っているの流石にエミリアも気付く。

振り返って、ゲツと顔をしかめた。

相手の方がスピードがあり、このままでは追い付かれてしまう。

「きやああああ〜！」

悲鳴を上げて必死に逃げる。エミリアが曲がったりしても相手はバッチリ軌道修正して追いつき、このままでは本当にあの斧をくらってしまう。

ヤバいもうダメ、そんな思いがエミリアの頭を過った瞬間、いきなり目の前に現れたギンに抱き抱えられた。

ギンはエミリアを抱えたまま地面を蹴って跳躍。

相手の頭を越えて後ろに着地した。

ターゲットがいなくなったスタティリアは攻撃を止める為に膝を曲げてブレーキを掛ける。

「大丈夫か？」

「……ごめん、なさい」

ギンはエミリアを抱えたまま穏やかに訊く。

その問い掛けにエミリアはシュンとして謝った。

これで二度目。自分の不甲斐なさはよく分かっている。ギンがいなければ既に二回は死んでいるのだから。

シュンとしたエミリアに対してギンは穏やか。

別に怒りやイラつきが一周回ってこうなったわけではない。

地面にエミリアを降ろしてポンッと頭に手を置いた。

「そういえばエミリアは今日が初めての戦闘だよな、気にするな、

仕方ねえよ。体に疲れも溜まってるだろうし。それに、全力で逃げるなら背中見せなきゃ無理だしな」

「……」

最初の予想よりもエミリアはなんだ言いながらしつかりと戦えていたので忘れていたが、エミリアは今日が初めてである。

だったらミスなんて当たり前。

色々と求め過ぎた。

ギンは自分のミスだと判断したのだ。

誰も最初から動ける筈が無い。

相手があんな巨大なやつなら尚更だ。

エミリアは黙ったまま、しかし目を驚きの色に染めてギンを見つめる。

「それに最初に俺、言ったしな。『ヤバかったら俺がフォローする』って。だから好きに動け、好きに動いて援護してくれ。何かあれば俺が全部フォローする」

そう言っただけは二回ポンポンツと頭を優しく叩き、ギンは一歩前に出て前を見据える。

ちょうどステイリアが二人の方へ向き直したところであった。

ギンは一度エミリアの方へ振り返り、大丈夫だから楽になれよとニツと笑い、直ぐにまた前を見る。

次の瞬間にはギンはもう駆け出して間合いを詰め、左手に持ったセイバーを構える。

対する様にステイリアも斧を構えてギンの攻撃に備えた。そこにギンは飛び込み、刃を縦横無尽に駆け巡らせ、相手も斧で応戦し始める。

ヒトとしてはギンは背が高い方だが、それでもステイリアと比べたら圧倒的に小さい。

それなのに、普通に剣戟が始まった。

体格差をはねのけて剣戟を繰り広げるギンを見ながらエミリアは考える。

ギンなりの精一杯のフォローの言葉。

自分に色々求めたのが悪かったのだと。

しかしそのギンの考えをエミリアは一人で首を横に振って否定する。慣れてないとか初めてだとか、そんなもの言い訳にすぎない。

こんな緊急事態だ、初めてだろうがなんだろうがやらなければならなかった。

『覚悟を決める』と自分で言ったが、未だに決めきれてないらしい。エミリアは自分の頬を二回、ピシヤリと叩いた。

気合いと闘魂注入である。

「よし……っ！ 頑張れ、あたし！」

両手でしっかりとロッドを握り、剣戟を繰り広げるギンを見る。

……自分が入る隙が全く無い。

眺める事しか出来ないエミリアであった。

一振りの威力では勿論体が大きい方が破壊力があり、有利だ。

だがここまで体格差がありながらも剣戟を成り立たせてるのならばギンが優位になる。

一撃凌げば懷に潜る事も出来る。

体のサイズ同様得物の大きさも全然違い、小さいギンの小回りは相手の脅威になるのだ。

実際剣戟が始まって以降ギンが押している。

ただスタティリアも上手い具合に攻撃を防ぎ、またせっかく入っても頑丈なのかなかなか有効なものにはならない。

攻撃を叩き込む場所は毎回変えているのだが、それでも未だに弱点らしき箇所は見つからない。

優位に立ちながらもギンは我慢の時を過ごしている。

「……やっぱ頭かなあ」

上から襲い来る斧を受け流し、ギンはポツリと呟いた。いくら撃ち込んでも有効打にならないので、一つため息をつく。

頭なんてあからさまな弱点、相手だって警戒してるに決まっている。狙うのは流石に骨が折れる。

かと言ってこのまま長期戦になれば体力で分が悪い。

エミリアには疲労が溜まっているし、そもそもスタティリアは機械である。

おそらく奴さんにはスタミナという概念が無い。

「……！ ラッキーツ！」

体を捻って斧を躲し、前へ跳ぶ。

すると上手い具合に懷に潜り込め、頭を狙える位置を取れた。

空中で体勢を立て直して相手の顔の目の前へ。

ギンは左手のセイバーを強く握り、上段から振り降ろす。

相手もこれは防ぐのも避けるのも無理だろう。

よしっ、そう思った瞬間に異変が起きる。

振り降ろされている途中でセイバーの赤い刃が揺れ、消えた。

そうなるど勿論の事ながら、上段から振り降ろされたのは柄だけで

頭には当たらない。

スカしたのだ。

これにはギンの左目も驚愕の色が映る。

「なっ、あぁっ!?!」

振ったが何も当たらず、左腕に込めた力は空回り。

ギンは相手の顔の目の前でクルリと一回転してそのまま下へ落ちる。そんな隙だらけの体勢にスタティリアが何も仕掛けないわけが無い。

右手に掴んだ斧ではなく、何も持って無い左手をギンに向かって振り降ろした。

何も持つてはいないが、五本の指は鋭く、ヒト一人引き裂くのは余裕そうである。

しかしギンをその鋭利な指が引き裂こうとしたその時、スタティリアの真上で何かがチカチカと光って点滅し、落雷が発生。

完全な不意打ちとその威力にスタティリアは動きを止め、指がギンを引き裂く事は無かった。

間一髪でバラバラを免れたギンは地面スレスレで体勢を立て直して着地。

全速のバックステップで相手の間合いから脱出する。

「だ、大丈夫!？」

「……ナイスフォロー、命拾いした」

エミリアがギンに駆け寄る。

ロッドの先が黄色く光り、バチバチと未だに音を立てていた。

あの落雷はエミリアの攻撃である。

ギンに何が起こったのかは理解出来なかったが、体がヤバいと思う前に動いたのだ。

隙があったとかそんなじゃない。

繰り出したテクニックも無意識の反射だ。

ギンは一息つきながらエミリアに感謝の言葉を述べて額の汗を拭く。

いくらなんでもさっきのは冷や汗が出る。

「何があったの? なんか攻撃外したみたいだったけど」

「……急に刃が出なくなってるな。今もだ」

左手で握った柄をチラツと見ながらギンが困った様に言う。

するとエミリアは「ああ」と何か納得した様な声を出して頷いた。何か分かるのか、そう言ってるギンが不思議そうにエミリアを見る。

「あんたのそれは『セイバー』っていうセイバー系の……ってセイバーセイバーややこしいな、もうっ。……ともかくそれはセイバーって武器の系統で一番安い武器なの。一般人の護身用とか、あたしみたいなルーキーが使うような。ここまで分かる？」

「……まあ」

「でもあんたって全然ルーキーじゃないし、あたしは戦い方なんてよく分かんないけど、それでも武器の使い方が独特だって事ぐらいはあたしにも分かる。そんなだからあんたの使い方がその武器のキャパシティ越えちゃって、壊れたの」

エミリアは丁寧に素早く、先ずはその武器がどれだけショボい物なのかを言い、ギンに理解出来てるか訊く。

ギンが頷いたらまた直ぐに今度はそれが壊れた事。それとその理由を一気に喋った。

要は武器の性能がギンの実力に追いついていないという事である。

ギンはそれを聞いて再び柄を見る。

ちゃんと理解出来てるのかは、ぶっちゃけ怪しい。

「って事は、もうこれは刃が出ないって事か」

「そっ。前使ってたんの持ってたでしょ？ 早くそれ出した方がいいよ。……ほらまた来た！」

どうやら理解していたギンが柄を見ながらエミリアに確認する。エミリアは素早く頷き、持ってきてるといふ前の武器を出すように

言う。

そして上を見上げて顔を引きつらせた。

スタティリアが最初と同じように、宙高く跳んで二人を叩き潰そうと斧を振り上げているのだ。

二人は一度走って避難する。

相手は空中で少しばかり補正は出来ても完全に移動は出来ないので、少し離れば安全だ。

「持ってきてはいるんだけどな……もう使わないと思って封してんだ」

「封って何よ!? そんなの聞いた事無いわよ!」

ギンがポツリと言う。

着地して床を叩き割るスタティリアから敢えて目を逸らしてエミリアは驚く。

今は隣にギンがいる。目を逸らしても大丈夫だからだ。

エミリアは『封』をする武器なんて聞いた事が無いと驚いたが、ギンは困った様に返す。

「してるもんは仕方ないだろ……」

「だったらちやっちやと解いて!」

封とかもうそんなもんはどうでもいい。

現在一番の問題はギンが丸腰であるという事。

素早く切り替えたエミリアがそう叫ぶ。

なんだか知らないが取り敢えず武器を持って欲しいのである。

スタティリアはまだ健在で、エミリア一人じゃ手に余る。

今も叩き割った床の中からゆっくりとこちらへ進んで来るので怖い。

「勿論解く。でもな、思いつきり封をしたから解くのに一分ぐらい

掛かるし、その間俺は完全に無防備になる。だからその間はエミリア、お前があいつを引き付けてくれないか？」

「……え？ ええええっ!？」

思わぬ展開にエミリアが叫ぶ。

あいつを引き付けてほしい。

まさかの頼みだ。

そもそもなんでそんなキツく『封』なる物をしたのか。そもそもそれはなんだ？

ツツコミたい事は色々あるが、それよりもその衝撃の方が大きい。引き付ける相手は勿論あの大型スタティリア。

でかいくせに意外と早い厄介者だ。

「大丈夫、お前ならやれる。俺はそう信じてる。いや確信してる」

そう言って戸惑うエミリアにギンは笑い掛ける。

よくこの状況で笑えるなとエミリアは内心想いつつも、言葉には出さない。

そして考える。

ギンは今まで色々助けてくれたが、自分はどうかだろうか。

……さっきの落雷攻撃しか思い浮かばない。

これで借りを全て返したとは誰も言えないだろう。

もう一度ギンを見て、近付いてくるスタティリアも見る。

「……分かった、やってみる」

「……すまない、ありがとう。ヤバくなったら解くの止めて直ぐにフォローに行く。攻撃は無理でも走って助けるのは出来るからな」

「……うん」

覚悟を決めたエミリアにギンは申し訳なさそうな表情で、これま

た申し訳なさそうな声で礼を言う。

エミリアは真っ直ぐ相手を見据えながら、ガチガチな顔だが任せといてと強気な言葉を返した。

それを聞いてギンは少しだけ安心する。確信してると言いながらも、やっぱり不安だったのだ。

真っ直ぐ見据えるのも、強気な言葉も後ろ向きな状態ではあまり出来ないし言えないものだから、それを見たら安心出来る。

しかしだからと言って『解く』のを遅くは出来ない。

エミリアは体力の限界が近く、何よりもまだルーキーなのだから。

ギンの右手の側の空間が歪み、長細い箱が現れる。

それに右手を置いて目を瞑る。

箱が青く光り出した。

ギンが『解く』作業に入ったと同時にエミリアもスタティリアに向かって駆け出す。

自分に気を引かせ、ギンを守る。

一分でいいから。

一分経てばギンが来る。

「せーのっ！」

まだ相手との距離はある。

さっきの落雷が効いたのか、それとも余裕なのか一步一步しっかりと床を踏んで向かって来るスタティリア。

遠距離ならばテクニックが攻撃の主体である自分が有利。

エミリアはロッドを振った。

黄色く輝くロッドの先から雷の矢が複数本放たれ、スタティリアに向かって飛んでいく。

「よし……っ！」

飛んでいった矢は相手の斧に弾かれたが、意識はこっちに向いた。矢の目的は攻撃ではない、ターゲット変更である。

これだけの距離があるならエミリアは遠距離からテクニクを撃つていればいい。そうしたら相手はギンに意識は向かず、自分を追い、またエミリア自身も距離があるから安全だ。

遠距離の攻撃手段を今のところ見せていない相手はまだ何か遠距離攻撃を隠しているとは思えない。

そんな戦略的な行動は『侵入者排除』のプログラムに出来る筈が無いのだ。

エミリアは自分を見据えるステイリアを確認すると、一気に横へ走り出す。

万が一自分から意識が外れても、直ぐにはギンに手出し出来ない様に。

時間があれば声なり何なりでどうとでもなる。

「視ろ、視るのよあたし！」

曲がりなりにもエミリアは軍事会社に所属している。

実際の戦闘経験は無かったが、仮想の戦闘訓練は一度だけ受けた事がある。……速効でリタイアしたが。

『視ろ』とはその教官とか同じ会社所属の人に言われた一つの教え。

今までずっと忘れていたが、背中を見せて逃げたりと散々な事をし、て頭の中で復活したのである。

その教えを唱えながら自分に発破を掛け、教え通り視続ける。

『視界から外すな』とギンは言い、『視ろ』と自分に訓練をつけてくれた人は言った。

今まで散々言われてた事が出来なかったエミリアもその大切が身に染みて、遂にしっかりとそれをものにした。

「！ やっぱり速い、でっかいくせに！」

エミリアを追って動いていたスタティリアがここで仕留めに掛かる。

床を強く蹴って加速し、一気にエミリアとの間合いを詰めた。

斧を右斜め上から振り降ろす袈裟斬り。

体が大きい分思ったよりも遠い場所からでも一撃は届くのだ。

先程までのエミリアなら焦ってパニックってそのまま潰されていただろうが、今は違う。

腕は震えているがそれでも冷静にロッドを構えて振る。

爆炎が先から放たれて相手の腕の側面に直撃。

的確なその攻撃は腕の力のベクトルを無理矢理変えて、その反動でスタティリアを横へ弾き飛ばした。

「こんなところで死んでたまるか！」

弾き飛ばした一撃はエミリアの自信になる。

何も恐れて震え上がる事は無い、『視ろ』というこの教えを守ればなんとかなる相手だ。

喜ぶのは束の間。

スタティリアは弾き飛ばされはしたが、それでも地面に叩きつけられる事は無かったのだ。

地面につく前に空中でなんとかバランスを取り直し、膝について着地。

少し床の上を滑ったが、それでも倒れるよりも立て直した時間は早い。

それを見てロッドをグッと握りしめたエミリアは、スタティリアを

迎え撃つ。

エミリアは賢い少女であった。

ギンの剣戟を見ながらスタティリアのモーションパターンを逐一記憶。

動く時の体の動かし方と好んで使う斧の振り方を頭に叩き込み、それらをどのタイミングでどのように使うのかを『視た』。

だからこそ先程の一撃が出来たのであり、今も相手の動きが分かる。スタティリアという機械に感情も好みも無いが、動きのプログラムを入れたのは旧文明のヒトだ。

そのヒトの好みが反映されてスタティリアは動く。

もうエミリアの頭にそれは入っている。

「はっ！」

巨大な斧を掻い潜り、股の間を通って後ろへ出る。

背中では最大の死角。

それは自分が一番、身をもって知っている。

黄色に輝くロッドを一閃、何本もの雷の矢を背中に向けて放つ。

それらが一気に背中に突き刺さり、スタティリアは前によろける。

バランスが崩れかけてる今がチャンス。そう思ってエミリアは追撃を掛けようとロッドを振ろうとした。

が、それは出来なかった。

相手は体勢を崩しながらも右手に持った斧を横に振り、そのまま無理矢理体を回転させて、全方位へ攻撃。

今まで見た事の無かったその攻撃にエミリアは対応出来ない。

追撃を掛けようとしていたので間合いの中にいる。

ヤバイ。

そう思っても出来る事は無い。防衛本能で咄嗟に目を瞑ってしまった。

一つ、エミリアは甘かった。

ルーキー故の甘さ。

今まで見た攻撃が相手の全ての攻撃ではない。

経験が浅いルーキーはどうしてもその少し考えれば当たり前の事を頭から無くしてしまう。

相手の突発的な行動に対処出来る実力も無い。

いきなりの行動に、ルーキーは反応出来ないのだ。

当たり前だが、致命的。

それが生き残る者と死ぬ者の差である。

そんなルーキーのエミリアもまた反応出来ない。

目を瞑って体を強張らせ衝撃に備えるばかりだが、いつまで経っても何もこない。

何も感じず即死か？

恐る恐る目を開けると、目の前にはもう見慣れた長い白髪と、所々に色とりどりの糸で見事な刺繍の施された黒いローブの様な服がゆらりゆらりと靡いていた。

その奥では床に倒れてもがくスタティリア。

驚く事に、右腕の肘から先が無い。

「……悪いエミリア、一分半掛かった」

「え？ ……あ、うん」

チラッとエミリアの方を見て、ギンがまたもや申し訳なさそうに言う。

ぶっちゃけエミリアは途中から『一分』とかそんなもの考えて無かった。

ただ必死に対峙していただけ。

エミリアはしっかりとギンを見る。

左手にはギンの左目と同じような深く、しかし澄んだ綺麗な蒼の刃が握られていた。

ギンが壊れるまで使っていたセイバーの様にフォトンが刃を作って

いない、ちゃんと全てが全て金属などでできた柄も鐔も刃も蒼い、綺麗な剣。

少し反った片刃の剣。

『カタナ』という珍しい物だ。

「よく頑張ったなエミリア、スゲーよ」

「……うん」

ギンが右手でポンポンと頭を撫でる。

エミリアは撫でられるまま、ジッとギンを見た。

安心感が半端じゃない。

そこにいるだけで大丈夫だと確信出来る。

さっきまでは別段そんなのは感じなかったが、エミリアはギンの戦闘『視て』分かったのだ。

この青年がどれだけ強いのか。

正確には勿論分からないが、それでも本当に怖いくらい強いというのだけは分かった。

身のこなしや剣捌きは勿論の事、動きや癖の把握、隙の突き片作り方などの分かりづらい勝負への伏線。

エミリアには到底把握出来ない相手の小さな隙を見逃さない目。

何もかもが別次元。

それがエミリアから見たギンであった。

「疲れただろ？ ゆっくりしてくれ。……直ぐ終わるから」

ギンがそう言ってカタナを構える。

蒼い刀身が煌めき、周りの空気が炎の様に揺れた。

肘から先の右腕と右手で握っていた斧は全く別の場所で転がっており、漸く立ち上がったスティリアは何も持って無い左手で、それでもなお襲い掛かってくる。

鋭い指なら確かに武器なるが、もう勝負は決していた。

右手でエミリアに一步後ろ下がる様に指示を出し、ギンは左手をヒュッと横へ一閃。

たったそれだけ。

それだけだが、その瞬間スタティリアの胴体が上下真っ二つになって崩れ落ちる。

どこまでも呆気無い決着であつた。

「はあ……はあ……。生き……てる……。？　あたし、生きてる……？」

真っ二つになって崩れ落ちたスタティリアを見てエミリアはヘニヤヘニヤと膝を折って床に座り込んでそう呟く。

緊張が取れて体から力が抜けたのだ。声にもあまり力が無い。

疲労も溜まっている。

が、次第に心の底から沸々と沸き上がる感情がその疲労を吹っ飛ばして爆発した。

「……やった、やったよ！　あんなでっかいのを倒しちゃった！　すごい、本当にすごい！　あんたを信じてよかった！　やった、やったあ！」

エミリアはへたり込みながらも嬉しそうに笑う。

ギンもそれを見て少し笑った。

さっきよりもずっと声が出ており、疲労より喜びの方が上になってそれが疲労感を一時的に吹っ飛ばしている。

嬉しそうに何度も両手でガッツポーズをして笑う。

今エミリアは物凄い達成感に全身浸かっている。

「ってあたし、結局ギンに守られてばかりか」

「俺がいつお前に『守る』って言った？ 俺は『フォロー』するって言ったんだ。いいか、『フォロー』ってのは手を添えてやるだけで――」

「あー、はいはい分かった分かった。……ありがとう」

喜んでいたエミリアだが、ギンを見て今度は少しだけ申し訳なさそうにそう言っちゃっと自虐的に笑った。

しかしギンは首を傾げる。

そして『フォロー』とはどういう事かをグダグダと説明し始めるが、それはエミリアが遮った。

ギンに向かってニコツと笑い、へたり込んでるから頭だけだがペコリと下ろし、ありがとうと言う。

ギンは照れ臭いのかそっぽを向いた。

「……俺も初めてのチームだったからな、上手くフォロー出来たんなら安心だ」

「えっ、初めてなの！？」

「まあな。俺はずっと一人だったし。もっと言えば、同じヒトとこんな長い間話したり一緒にいるのも生まれて初めてだ」

そっぽを向きながらギンがボソツとそう言う。

それを聞いてエミリアが驚くのは当たり前だろう。

初めて自分以外の誰かと組んでアレだ。

相手がド素人のエミリアだったから連携の様な難しいものは確かにしていないが、それでもである。

ギンはそっぽを向いたまま更に続けるが、その内容が暗すぎる。

本人は特に何も思っていない様子だが、他人が聞けば衝撃的にもほどがある。

事実エミリアの表情が固まった。

なんて返せばいいのかも分からない。

「だから今もちゃんと会話出来てるか不安なんだ。一応、街で流れてるテレビ番組を見てノリだけ覚えたんだけどな。……ちゃんと俺、会話出来てるか？」

「え！？ あ、うん、バッチリ……」

「そうか。なら良かった」

一人で話を進めながら、いきなりエミリアに問い掛けた。

衝撃的な内容で固まっていたエミリアは不意を突かれたが、話は聞いていたので辛うじて返事は出来た。

バッチリはお世辞でもなんでもなく本音。

言われて聞いても特に違和感はない。

向こうを向いているのでどんな表情をしてこんな事を言っているのかはエミリアには分からないが、哀しげではない。

淡々と、普通に思い出を語る様に言っているあたり、表情は普通のだろうか。

「それにしてもエミリアはスゲーな。頑張ったら『ホンモノ』になれる、俺みたいな『ニセモノ』じゃなくて」

「？」

これからどう会話をすればいいのか分からないエミリアにギンは普通に話し掛ける。

まだそっぽは向いているが。

対してエミリアはいきなり『ホンモノ』だとか『ニセモノ』だとかよく分からない事を言われて頭がこんがらかってしまった。

ただでさえどう会話すればいいのか困っていたのだから、抽象的な言葉が入ればなおさらである。

「なに、『ホンモノ』とか『ニセモノ』って？」

「強くなるって事だ。……さてと、休憩もしたし行くか？ 扉開いてるしな」

分からずに首を傾げるエミリアの方をやっとギンは向いた。どうやら照れ臭さは取れたらしい。

そして自分で言ったくせに、自分の言葉を適当に流す。

ますます首を傾げるエミリアであったが、ギンの言葉を聞いてピコーンと反応し、首が真っ直ぐになる。

扉を見ると確かに開いていた。

元々の目的はここからの脱出、スタティリアと戦う事ではない。

テンションが上がるエミリア。

へたっていた足にも力が入り、スッと立ち上がった。

疲れが完全に取れたわけでは勿論無いが、レスタを使わずにゆっくり休めたのは大きい。

なにせレスタは体力回復の為のテクニクであるが、そのテクニクであるが故に精神力や集中力は使う。

回復した様で、本当の意味で回復はしていないものなのだ。

「うん、それじゃあ行こっか」

エミリアが笑顔でそう言うと、ギンが先に歩き出す。

先導はギン、それはここに閉じ込められてからの基本的なパターンである。

何かあれば直ぐに対応出来る様にということだ。

ピクリ、ギンが何か反応した。

本当に小さな、微かな音が後ろから聞こえたから。

後ろを素早く振り返る。

すぐ後ろにいると思っていたエミリアは意外と距離の開いたところで背伸びをしていた。

行こっかと言いながらも自分はマイペースに着いて行く気だったら

しい。

そしてその後ろには、白い巨体。

何か起動した音も足音も聞こえなかったのに。

それとも実際は聞こえる様な音だったが、初めての事が多く起こって少し浮かれていたのか。ギンの頭にそんな事が浮かんでは消えた。しかしそんな物に時間を取られてはいけない。

知らせなくては。

そう思ってギンが名前を呼ぼうとしたが、その前にエミリアも気が付いた。

「えっ？」

何かの気配を感じ取ってエミリアが振り向くと、そこには白いスタティリアが立っていた。

先ほど倒したやつではない。新たに動き出したのだ。

相手の間合いどころか、ほぼゼロ距離。

ギンは少し離れた場所にいて間に合いそうに無い。

スタティリアは右手に持っている斧ではなく、何も持っていない左手を振り上げた。

その鋭い指ならヒト一人殺めるには十分、しかも斧とは違い繰り出しも早い。

それでもエミリアは逃げようと走る。無意識に悲鳴を上げながら。

しかし逃げられる筈も無く、相手の左手の方が早い。

避ける技術なんて持っているわけも無く、エミリアは走りながらも自分に迫る指を見てしまう。

やけにスローモーションに見えるそれが自分を引き裂くそのほんの一瞬前に何か黒い物が間に割って入った。

そしてエミリアはその黒い物に押されて後ろへ飛ばされる。

が、エミリアは飛ばされながらも見た。

黒い物から何か青い光が飛び出てスタティリアを後ろへぶっ飛ばし

たのを。それと同時に黒い物も後ろへ弾き飛んだのも。

後ろへ飛ばされたエミリアは床を滑り、倒れ込む。

体が少し痛むがそれどころではない。

直ぐに立ち上がった。

嫌な予感が胸を突き、体を動かし黒い物に近寄った。

ギンだ。

黒のローブは右肩から斜めに引き裂かれ、そこから夥おびただしい量の血が吹き出している。

それがギンの長い白髪を朱に染め、顔は青くなっていく。

「やだ、やだよ……！ どうしてあたしなんか……庇おびって……。起きてよ、起きて、起きてってば！」

酷い有り様だがそんなものは関係無い。

エミリアはすかさず駆け寄り、自分の手が真っ赤になるのも気にせずギンの体を揺すって叫ぶ。

眼帯に隠されてないギンの左目が少しだけ開いた。

「……浮か、れ、て、気配に、気付かなかった………ダセー……な」

青くなっていく顔でギンがポツリと言う。

喋らないでエミリアが叫ぶと、ギンはもはや焦点の合っていない目をエミリアに向けて、笑った。

「……逃げれ、る、よーに……『フオロー』、は……したか、ら、な。逃げ……ろ、よ」

最後にギンはそう言って、左目が閉じられた。

顔が更に青くなっていき、体も一気に冷たくなっていく。

体に触れているエミリアはそれを直に感じた。

しかしそれが認められない。

エミリアは泣きながら骸を抱えて動かない。

後ろに飛ばされていたスタティリアは起き上がり、今度こそはと次は斧を振り上げた。

エミリアは冷たくなった胸に顔を埋め、真っ赤になりながら悲痛な声で叫ぶ。

「どうして、どうしていつもそうなの！？ みんなあたしを置いてっちゃうの！？ あたしを置いて行かないでよ！ 一人にしないでよ！ お願いだから……目を開けてよ！ 誰か、誰でもいいから、助けてよおっ！」

もはや誰もいない中で、背中を仰け反らせて必死に叫ぶ。

……そしてそれは起きた。

エミリアが背中を仰け反らせて叫んだ瞬間、彼女の体が金色に輝く。

その光に当てられてスタティリアは塵となって消滅した。

そしてエミリアの体に紋様の様なものが浮き上がり、背中の後ろには輝く何か羽の様に浮かぶ。

同時に体もフワリと浮き上がり、床の少し上で止まる。

『あなたを……死なせはしません……！』

確かにエミリアの口から発せられたのにその声は、エミリアの少女の声ではなく、大人びた女性の声だった。

EP1：翼を抱いた少女（後書き）

はじめましての方は、はじめまして。

そうでない方はいつもありがとうございます。

作者の神威という化合物です。

主成分がH、C、Oの化合物で有機物だと思われます。実際のところ知りませんが。

まずは謝りたいと思います。

長すぎてごめんなさい。

最初は一つでという愚かな発想がこの様な事態を招き、非常に反省しております。

今後は今回の半分あるか、半分無いの文字数でございます。

ゲームといくつか相違点がございます。

テクニックや武器、属性、動きなど。

追々説明しますので、作中で「あれ？」と思っても今は何も言わないで欲しいです。

ただ、この先でも説明がなかった場合は一言お願いいたします。

本家ではEP1が終わるとOP曲が流れますよね。

対抗します。

『アンハッピーリフレイン』で。

曲の疾走感で勝負。

歌詞とは特にリンクしておりません。

J-POPではなく敢えてボカロを持ってきたのはゲームをやった事のある方は分かる筈。

それでは今後、よろしくお願いいたします。

EP 2..リトルウイング

「同伴は難しいネー。ウン、ウン。デモ、気持ちとてもウレシイヨ
ー。じゃあ、マタネ……」

ギンの耳に声が入った。独特な抑揚の、ふんわりとした柔らかな
声。

うつすらと半目を開ける。

ボヤけているが前に誰が座っている。その後ろには窓の様な物が見
え、そこから星空らしきものが広がっているのが見えた。

気が付けばギンはどこかに寝っ転がっていた。

起き上がろうと体を持ち上げるが、重い。

「……オウ、気が付いたネ！ チョット、待ッテテネー！ シャツ
チョサン、シャツチョサーン！」

「ああ？」

視界がだいぶクリアになると、漸く目の前にいる人物の顔が確認
出来た。

明るい黄緑の長い髪を盛った、いかにもな髪型。肩より上が無く、
胸元が大胆に開いた白いタイトでロングなワンピースを着た女性。

両肩の一部と耳が白とオレンジの機械っぽい様さまになっている事から
辛うじて彼女がキャストだと分かる。

妙な抑揚の声も彼女のもののようだ。

そんな彼女はギンがなんとか起き上がったのを見てポンと手を叩
き、微笑みかける。

そして後ろを向いて誰かに声を掛けた。

気の無い返事が一つ返ってきただけであったが。

「お客サン、起つきシタヨー。シャツチョサンも起つきシテヨネー！」

「あー……」

向こうを向いてキャストの女性が誰かに言うが、何も起こらない。女性はフウッと息を吐いて肩を落とし、やれやれと首を振る。

が、直ぐに切り換えてギンの方を見て眩しい笑顔を作った。恐ろしい切り換えの速さである。

あまりに切り換えが速いのでギンは上手く笑い返せない。なんとか作った笑みもちよっと固い。

「お客サン、『リトルウイング』ヘヨウコソ。ワタシ、チェルシ
ー。ヨロシクネ」

「……え？ ああ、初めまして」

ニッコリと眩しい笑顔を浮かべたまま、スツと頭を下げる。

無駄な動きが一つも無い洗練された礼、見事過ぎてちよっと怖い。威圧も何もする気は本人には無いのだろうが、その不自然なくらい滑らかな動作が勝手にギンへ力を掛ける。

挨拶を返さないとヤバイ。

咄嗟にそう思い、ギンは吃^{ども}りながらも返事をした。

「はい、ハジメマシテネ。礼儀正しい人で気に入ったヨ。今後ともご指名ヨロシクネ！ シャツチョサン、シャツチョサーン！ お客サンがお待ちヨ」

返事をしたのが好印象に繋がった。

女性——改めチェルシーはニッコリ笑顔を更に深めて言葉を返す。なんか敵わない気がしたギンである。

なのでわけが分からないまま取り敢えずチェルシーに向かってよろ

しくお願いしますと頭を下げるギン。

ここはどこだとか、基本的な情報は何も持っていない。完全に流れるままだ。

チェルシーは再び後ろを向いて『シャツチョサン』に呼び掛ける。今度はしっかりとした返事が返ってきた。

「まあ待てって、今通信中だ。……おう、俺だ俺。今すぐ俺んどこ来い。ああ？ イヤだ？ 甘えてんじゃねえぞ！」

チェルシーの向いている方向をギンも見る。

ここはどこかの事務所なのだろうか、テーブルや何かの機械類、モニターなど様々な物が置かれてたり並んだり吊るされていたりするので、上半身しか持ち上がっていないギンにはよく見えなかった。ただ、声を聞いて何かを通じて誰かと話しているのは分かる。

機嫌が斜めなのも分かった。

「アラアラアラ。それじゃ、ワタシから軽く説明ネ」

ご機嫌斜めな『シャツチョサン』の声を聞いてチェルシーは困った様に首を振った。

そしてギンの方へ向き直り、隣のテーブルから一枚の紙を取ってギンに渡す。

紙には何かの写真と、その下にはビッシリと説明文がある。

裏には羽をモチーフにしたマークと『リトルウィング』と読める文字。

下にはやっぱり説明文だ。

「ココはリゾート型コロニー『クラッド6』。そのクラッド6の中にある、民間軍事会社『リトルウィング』の事務所ナノ。アナタ、シャツチョサンが連れてきたお客サンネ。今までずっと寝ていた

のヨ。ぐっすり、すやすや。寝る子は育つって感じダツタネ」

表にある写真、これがどうやら『クラッド6』らしい。

かなり無理矢理だが図形で言えば円錐に近い形をした物に、二つの環が取り囲んでいる。これがクラッド6の全体だ。かなりでかい。そして裏に記載されたのがチェルシーの言う軍事会社『リトルウィング』のマークだろう。実際そう書いている。

説明文を読む限り、『軍事』というよりは『なんでも屋』っぽい。じっくり渡された紙を読むギンに、チェルシーが何故ギンがここにいるのかを曖昧ながら説明する。

ただ、あまりに曖昧というかなんというか、『お客さん』という事しか分からない。

「よーお、気分はどうだ？　おうおうおう、面白いぐらいわけが分からないって顔してるな。んじゃま、軽く説明でもしておくか」

チェルシーの説明に一つ区切りがつくとちょうど、奥から男性が一人現れた。

レリクスでエミリアを怒鳴っていた男性だ。

背が高くがっしりした、前髪が長くて目が隠れて、髭も顎から顔の輪郭に沿って深く生えていて、耳まで毛深いビーストの男性。

薄い赤色のロングコートに身を包み、ニツと口の片方をつり上げている。

ギンはただボーッと下から男性を見上げていたが、ハツとして立ち上がった。もう目が覚めた時の変な感じもしないから立てる。

ずっと座っているのもまずいし、自分が『お客さん』でもこれはないだろうと思ったからである。

「俺は、クラウチ・ミュラー。この軍事会社『リトルウィング』を取り仕切っているモンだ。ま、軍事会社といっても肩書きだけでな、

やってる事はそこの便利屋と大して変わらねえ。要人警護とか、廃棄プラントの調査とかシヨボいもんばかりさ」

親指で自分の胸を指して名乗る男性、クラウド。チェルシーに渡された紙の裏面にあった『リトルウィング』の社長らしい。

軍事会社という名前だが、実際は便利屋と変わりないと自虐的に笑うが、確かにギンも紙の説明文を読んだ時は『なんでも屋』っぽいなあと思ったので、変に口を挟めない。そうなんですかーと曖昧な相づちを一つ返すだけ。

「で、この前あったレリクス調査。そこにもたまたま参加してたってわけだ。色々あって、レリクス内に閉じ込められたバカを救出するっつー任務に切り替わっちゃったけどな」

クラウドはそう続けてギンを見る。

だが、ギンはへえーっと他人事のように相づちを打つだけ。自分の事だと気付いていない。

クラウドの話を読んだ漠然と聞いているだけである。やれやれとクラウドは首を振った。

「その救出されたバカがお前さんだよ。しかも、身元の確認も取れないときた。しょうがないから俺が引き取る形で一旦ここまでご招待、ってわけよ」

「……へえー、って俺か！」

ビシッと指でギンを指してクラウドが言う。

身元不明のバカとはすなわちギンである。

これまた適当に相づちを打ったギンも、打った後に気が付いた。ただ『身元不明』という、なんとも怪しい自身の立場は特に気にし

ていない。

ああ俺かと軽く手を叩いただけである。

「……俺と一緒にいた子は？」

あのレリクスには自分以外にエミリアがいた。

死んだと思った自分が何故か生きているという事は、エミリアも確実に救出されている筈だ。

引き裂かれた自分とは違い、エミリアはギンの知る限り外傷は殆ど無いのだから。

っていうかなんで自分は生きているのだろうか？

色々頭が考えだしてギンは一人で勝手に混乱しだす。

「うん？　一緒にいたヤツだあ？」

クラウドが何か言いかけた瞬間、ビーツと何かの機械音が響いた。するとクラウドの口の片方がニツと上がり、何か言うのを止めてしまう。

ギンはギンで勝手に一人で混乱していたが、機械音でハッと元に戻る。

首を左右に動かして何が起こったのか見てみるが、何もない。

「おっ、丁度良いタイミングだな。さっさと入れ！」

クラウドが大声で怒鳴る。

するとギンの斜め後ろから風が通る様な音がして、何かが開く。今まで気付かなかったがそれは扉であった。

扉が左右に開くと、そこからムツツリで不機嫌そうな表情をしたエミリアが現れる。

ギンの大した量のないエミリアの記憶の中、しかしその中では見た

事のない、最高にご機嫌斜めな表情に見える。
同時に疲れが溜まっているのか、目が赤い。

「……あのさ、おっさん。今日ぐらいカンベンしてよ。あたしがどう
いう状況だったか、知ってるでしょ？」

不機嫌でブスツとした声だが、やはり疲労感も混じっている。
覇気の無い声はギンのエミリアのイメージとは違う。
相当参っているらしい。

腕も力なくブラーンと揺れている。
しかしクラウドはそんなの気にしていないのか、はたまた敢えて
無視しているのかは分からないが、ともかくエミリアの言葉をバツ
サリ切り捨てた。
鬼である。

「知らねえし、興味もねえからカンベンしねえよ。それよりお前、
客の前でそんなツラするんじゃないか」

「……えっ？ あっ、は、はじめまして！ ……って、どこかで見
たような？」

クラウドの怒声と『客』という言葉に反応してか、エミリアは少
しばかりビシツとする。

そしてさっきよりも幾分かシャキツとした声で、今までも視界には
入っていたであろうギンに向かって挨拶する。

クラウドに言われて気付いたらしいので、ギンは視界には入ってい
ただろうが、ただの『物』でも判断されていたっぽい。

ペコリと頭を下げ挨拶をし、頭を上げて相手を見た途端にエミリ
アの表情が変わる。

首を傾けてギンの顔をジツと見つめ、一度体全体をじっくり見る為
に視線を下げ、また顔を見た。

じわじわとエミリアの顔に驚愕の色が広がる。
ちなみにギンはどうすればいいのか分からずに固まったままだ。

「え……？ ええええーっ！？ あんたは……！！」

漸く今日の前にいる男が誰だか分かり、エミリアは大声を出しながらよろける様に数歩下がった。

あまりの大きさにクラウチは顔をしかめながら耳を両手で塞ぎ、チエルシーはキョトンと二人を見つめる。

ギンはやっぱりどうすればいいのか分からず、取り敢えず右手を上げて「よっ」と一言。

……驚愕するエミリアには届かなかったが。

「い……生き……てる？ ……なんで、生き……生きてるの！？
なんで、おっさん！？」

「勝手に他人を殺すんじゃないよ。お前、ほんと適当な事しか言わねえな」

口をアワアワさせ、震える手でギンを指差しながらエミリアはクラウチに問い掛ける。

クラウチは先程のエミリアの大絶叫にイライラしているので、機嫌悪くぶっきらぼうに答えた。

何も知らないクラウチにとってギンが生きているのは当たり前である。

死んでたらここに連れて来ている筈が無いのだから。

しかしエミリアにとってこれは大問題だ。

何故なら今彼女の気分がよくない原因は殆どギンだったのだから。

「ていうかおっさん、生きてるの知ってたんなら、教えてよ！
でも、よかった……よかったあ……。あたしも気を失ってて、気が付

いてみればここにいたしさ……。あそこで起こった事って全部、夢だったんだ……。よかったあ……」

なんで教えてくれなかったのかとクラウチに愚痴を言い、心の底からホッとして胸を撫で下ろすエミリア。元のエミリアらしさが復活してきている。

自分のせいで他人が死んだ、その罪悪感にずっと苛まれていた彼女にとって一番の朗報だ。実はギンが生きていたという事は。

あれは夢だったんだという安堵と罪悪感からの解放で、なんとも言えないふにゃふにゃな笑顔を浮かべる。

「やっぱりお前ら知り合いだったんだな。よーしよーし、狙い通り。エミリアも懐いているみたいだし、好都合だ」

「狙い通り？ 好都合？」

二人のやり取り、というよりはエミリアの反応を見てクラウチはニヤニヤと笑って呟く。

そのクラウチが呟いた言葉の意味が分からないエミリアは首を傾げた。

何を狙ってて、何が好都合なのかと。

ギンはもう一度チェルシーに渡された紙をジッと読んでいる。話はおそらく聞いていない。

「お前さん、フリーなんだろう？ 丁度良い、このままうちの会社に入っちゃえ」

「はあ！？ おっさん、急に何言ってるの！？」

「お前とは話してねえよ、黙ってる」

「ぐぐぐ……」

クラウチがニヤリとしながらギンに言う。

エミリアは目を真ん丸にして驚くが、ギンは何も言わない。騒ぐエミリアをバツサリと切り捨てる。

あまりにもバツサリとやられたので、エミリアは頬を膨らませて黙った。ただ、やっぱり不機嫌そうである。

腰に両手を置いてクラウチを睨み、無言の抵抗を始める。

しかしクラウチはそれも無視して何も答えないギンに対して更に言葉並べる。

本気の勧誘だ。

「うちは確かに小さな会社だが、お前みたいな経験者にはボーナスも弾むぜ？　今なら、いないよりはマシ程度のパートナーもつけてやるよ」

「へー、珍しく太っ腹だねー」

「何他人事みたいない顔してんだ。お前の事に決まってるんだろ」

「ええっ!?!」

給料にパートナー、ここぞとばかりに美味しい言葉を並べ、ギンを誘う。

エミリアが不機嫌そうな顔から一転、意外そうな顔で口を挟んだが、クラウチの言葉に再度驚きの声を上げる。

そういえば確かにクラウチは『いないよりはマシな程度のパートナー』と言っていた。

「どうだ？　試験も無しで、パートナー付きの仕事だ。わりと破格の条件だと思うぜ」

たとえばパートナーが『いないよりはマシ程度』でも、ボーナスを弾む可能性は示しているが、断言はしていなくても、それでも確かに破格の条件だ。

何より試験が無いという条件が、現在資源枯渇により慢性的に景気

の悪いグラールの社会で考えれば破格も破格のものである。
現在グラールでは不景気により雇用を厳選する企業が多く、試験の
レベルも年々上昇中なのだ。

そしてクラウチは知らないが、ギンは学が無い。
ほぼゼロである。よく分からないものは基本的に『ロマン』で片付
ける程。

試験を行えば受かる確率は限りなくゼロに近い。
故にこの上無い破格の条件というのは間違いないのである。

「なんかよく分からないが、分かった」

ジッと見ている三人の視線を浴びながらギンはサラリと答える。
かなり大事な決断の筈が、なんかよく分からないが承諾、という適
当さで。

一瞬三人はその適当さに面を食らったが、直ぐにクラウチが復活し
た。

笑顔顔を顔に浮かべて右手を差し出す。

「よし、決まりだな！ よろしく頼むぜ！ 実は既にお前用の部
屋も用意してある。おい、エミリア。コイツを案内してやれ。パー
トナーなんだから、仲良くな」

「ちよっとおっさん！ パートナーとか勝手に決めるな！ あたし
の意見も聞いてよ！」

握手しながらご機嫌に喋る。

部屋を既に用意していた辺り、たとえギンが入るのを渋っても無理
矢理入れるつもりだったのだろう。

そういう意味では本人が適当でも快諾してくれただけ良しとすべき
か。

しかしこれに納得いかないのはエミリアである。

まず自分の意見をまるで考慮に入れられてない。
そもそも意見一つ言えなかったし。

そして自分の扱いの酷さ。

パートナーというよりこれじゃあパシリである。

「……ほお、お前、それはつまり一人で働きたいって事か？」

「う……そういうわけじゃ……」

長い前髪の隙間からギラリとクラウチの目が光った。

うっ、とエミリアが詰まる。

ここは軍司会社である。

主な仕事は要人警護などのショボい仕事とクラウチは言っていたが、
『警護』だ。

有事の際は武器を取って要人を守らなければならない仕事。

要するに危険は伴う。

一人で派遣されると隣にギンがいるのではどっちの方が安全か、
そんなもの一瞬で分かる。

「偉そうなクチは一人で稼げるようになってから叩け！ おら、命令だぞ！ 返事は！？」

「うー……！ はぁ……わかったよ。それじゃ、あたしは先に居住区の入口に行ってるから……」

最後にもう一言クラウチが怒鳴り、エミリアは渋々引き下がった。
それに自分のパートナーが全然会話した事の無い人になるよりも、
ある程度知ってるギンの方がいい。

大きなため息を一つ溢してエミリアは事務所から出ていった。
それを見てチエルシーはやれやれと首を振り、クラウチは腕を組んでムスツとする。

「……まったく、返事一つマトモに出来ねえのか、あいつは」
「シャッチョサン、怖い顔するからネ。もっと優しくしてあげると
イイヨ」

クラウドはエミリアの返し方が気に食わないらしく、不機嫌そうに呟いた。

だが隣のチェルシーはその表情がダメなんだと言い、もっと穏やかな顔でと口角を上げる様にと注文をつける。

怖い顔してたら良い返事なんて返ってくる筈が無いと。

クラウドはますますムスツとしながらギンの方を向いた。

「なんでロクに働きもしねえ社員に優しくしてやんなきゃいけないんだよ。なあ、お前もそう思わねえか？」

「……優しくしないといけないんじゃないのか？ 相手は子供だしな」

クラウドはギンに助け船を求めるが、あっさりと跳ね返された。

ただ、ギンは別に跳ね返すつもりは無い。

単純に考えた結果エミリアには優しく接して、多少自由に行動させた方が彼女は伸びる気がしただけ。

海底レリクスでギンが思った事である。

制限は多少必要だろうが、それでもその制限下ではのびのびやらせるべきだろう。

そうしたら彼女は本当に化ける。

「なんで関係の無いガキをそこまで甘やかさなきゃいけないんだよ。まさか、エミリアと俺は家族だとも思ってたのか？ ハッ、とびきりの冗談だな、そりゃあ！」

誰も味方してくれないのでクラウドのイライラは更に増す。

そして全然違う方向へと話を持っていき、ギンに向かって強く言う。これだけは言いたかったのかもしれない。

なんだかよく分からない所へ話が進み、キョトンするギンに一歩近付いてクラウチは更に力強く続けた。

言い聞かせる様に。

「勘違いしているようだからあらかじめ言っておくぞ。俺とエミリアは家族でもなんでもねえ。ただの上司と部下の関係だ」

「そんな、ツレナイネー。シャツチョサンは、あの子の保護者でもあるのに」

少なくともギンはエミリアとクラウチが親子だと勘違いしていたわけではないのだが、クラウチがあまりに強く言うので止められない。

二人の見た目は全然違うので、誰も家族とは思わないのだ。これで親子ならどれだけ母親似だと言いたい程違うのだから。

勘違いはクラウチの方である。

エミリアとの関係は上司と部下と吐き捨てたクラウチにチェルシーは悲しげな声を上げる。

『家族』ではないが『保護者』とはどういう事か。学のないギンは首を捻った。

「ツケの代わりに、お前共々押し付けられただけじゃねえかよ」

「お店が潰れる直前まで来てくれたの、シャツチョサンだけヨ」。

ワタシとエミリア引き取ってくれて感謝感謝ネ」

ぶっきらぼうにそう言ってクラウチはまた、ため息を一つ。

チェルシーはニコツと笑って引き取ってくれたのは感謝感謝と言うが、直ぐに「でも、もっと優しくしてアゲテ」とエミリアへの対応に文句を続けた。

ギンは『ツケ』という、またもやややこしい言葉が出てきて混乱する。

『ツケ』ってなんなんだと。

『ツケ』の代わりが『保護者』なのかと。

「あー、話が進まねえな。ともかく、俺とエミリアは家族なんかじやねえ。だが、書類上、俺はエミリアの保護者ということになっちまってるわけだ。そうでなければ、ロクに働きもしねえ煩いだけのガキなんてとっくに放り出してる」

「仕方ないヨー。最初は誰でもわからない事だらけヨ」

面倒臭そうにクラウドが纏める。

勘違いしたまま。

クラウドは更に放り出したいとまで言い放ち、チェルシーのフォロ―も少し苦しい。

どうやらエミリアは全然働かないらしい。

しかしギンはエミリアどうこうよりも『書類上は保護者』というよく分からない言葉のせいで更に混乱していた。

一般人なら直ぐに理解出来るのだが、ギンは違う。

保護者は家族で、家族は血の繋がった人じゃないのか？

『書類』ってなんだ？

頭の中でグルグル回る。

「まあ、あいつの過去とかはどうでもいい。正直そんな事に興味は微塵もねえしな。いいか、お前さんの第一の仕事はエミリアのお守りだ。タダ飯喰らいじゃなくなる程度に使えるようにしてやってくれ。それでいい。後は好きにしてくれ。じゃあ、後は頼んだぜ」

チェルシーのフォロ―を押し退けてクラウドは未だに頭がこんがらがっているギンにそう言って気さくに笑う。

そのままさつきまでいた自分のデスクの方へと帰っていく。
立ち上がった今はギンにもクラウチのデスクが見える。

……上に乗った機械が空中に映し出す映像の半分以上が誰かのグラビア。

仕事場でそんな物を堂々と見れる度胸は最強だ。

仕事はおそらくしていない。

「シャツチョサンはああ言うけど、エミリアはいい子ヨ。仲良くしてもらえると、ワタシもウレシイ、あの子もウレシイ。みんなウレシイ。さ、さ、お客サン。エミリアがお待ちヨー。レディを待たせちゃいけないネー」

いかがわしい画像を見ているクラウチにも慣れているのか、チェルシーはそれをあっさり無視して笑顔でエミリアの事を頼み、ギンの背中を両手でドアの方へ押す。

ギンはエミリアが良い子かどうかは知らないが、少なくとも悪い子ではないのは知っている。

背中を押すチェルシーの両手を体を捻って外し、チェルシーと向かい合う。

いきなりギンが抜けるからバランスを少し崩して前のめりになっているチェルシーに向かってギンは頭を下げた。

よろしくお願いしますと言って、そのまま事務所から出ていく。

いきなり頭を下げられたチェルシーは一瞬キョトンとしたが、直ぐに顔にニンマリとした笑顔が広がった。

もうドアが閉まりかけ、ギンの背中の半分も見えないが、それでもチェルシーはコチラコソと返す。

ドアが閉まると彼女は珍しく、軽く何かの曲を口ずさみながら自分のデスクへ戻っていった。

「……で、エミリアはどこだ？」

事務所を出ると、目の前には円形の巨大な広場。

見事に真ん丸な広場。かなり広く、天井も高く、そしてど真ん中には何故か噴水。きらびやかな水飛沫を上げて光っている。

『リトルウィング』のエントランスも兼ねているのだろうか。

室内なのに花壇もあり、ギンの知っている場所の中では断トツ一番でお洒落。

ベンチには『リトルウィング』の社員だろうか、客だろうか、結構な数の者が座って話していたり何事かをしている。

更に広場にはギンの後ろにある事務所へと続くドアを除いても五ヶ所程、どこかへと続く道がある。それぞれ違う色のカーペットが敷かれていたので慣れれば迷う事は無いだろう。慣れていなければ意味は無いが。

ギンは広場をグルリと見渡し、困る。

エミリアの姿が見えない。

今さらチェルシーに訊きに行くのは恥ずかしく、どうしたものかと困る。

そういえば『居住区』とかエミリアだったかクラウチだったかが言っていたかもしれない。

「……訊きに行こ」

広場に知り合いはいない。

もうこれは訊きに行くしかない。

ため息を溢してギンは回れ右、再び事務所へと入る。
ちよっと恥ずかしい。

ギンはまずチェルシーを探した。

いや、探すとかそんな事しなくても一瞬で見つかった。

ドアから一番近い『受付』と書かれたデスクに座って機械越しに誰かと話している。

仕事だろう。

……訊き辛い。

工作中的のチェルシーの邪魔するわけにはいかないので、クラウドのデスクをギンは見る。

さっき見たので場所は分かる。

案の定グラビアを見ていた。

チェルシーを含め事務所の中にいる人達は皆何事かの作業をしているが、クラウドだけは何もしていないのだ。

訊き易い事この上無い。

取り敢えずギンはデスクの方へと歩を進める。

「ああ？　何か聞きたそうな顔してやがるな？　エミリアの事か？」

「え？　あ、いや……」

気配に気付いたのかクラウドが顔を上げた。

そして開口一番、全然違う事を言う。

確かにギンは何か聞きたそうな顔をしていたが、エミリアの事ではない。『居住区』の場所である。

しかし残念ながらギンは今まで孤独なロンリーライフを送っていたので会話に慣れていない。まして一応は目上である。

クラウドの言葉にギンはなんとか反応は出来たが、返答は無理だった。

なのでクラウドは勝手に話を続けてしまう。

ギンはもう何も口を挟めない。

「……あいつは、常連だった店のママに保護してやってくれって押

し付けられたんだよ。店のツケ払いが、ちとデカかったからな。断るんならガーディアンズにつき出すとか言われたからよ。家出だったか知らないが、ママが言うにゃある日路地裏であいつが倒れてい たんで拾ったんだと。世話していたが名前と年齢以外何も明かさな かったみてえだ。……ロクに働きもしねえし、愛想もわりい。その くせ飯はがつつり食いやがる。いい迷惑ったらありやしねえぜ？ 追い出したいのはヤマヤマなんだが、次の保護者に委任手続きを取 らずに追い出すと俺が社会的なペナルティ食らっちゃうからな。こ うなったら自分の飯代くらいは稼いでもらわねえと、というところ でお前さんが来てくれた。とにかくバイトも長続きしねえし働こう って気力も無い。家事能力もねえしこのままだったら一日家でゴロ ゴロしてるばかりだ。いつまでもタダ飯喰らいはこっちも困るん でな。ちよつくら使えるようにしてやってくれ」

相当鬱憤が溜まっていたらしく、何も口を挟まないギンに向かっ て好き放題に言いまくる。

エミリアは酷い言われようだ。

まあ話を聞く限りではそう言われても仕方がないと言えは仕方がな いが。

ともかくクラウチは今までで一番饒舌になっていた。

ギンが訊いてもない事をあれよあれよと言いまくり、おかげでちょ っとエミリアについて詳しくなった。

かなりマイナス面に偏っているが。

エミリアについてボロボロに言いまくったクラウチはスッキリし た表情になり、ギンの返答も何も聞かずに左手をヒラヒラ振って部 屋を見てこいと送り出す。

結局ギンは言いたかった事は何も言えず、ただクラウチの愚痴を聞 いただけである。

釈然としないギンではあるが、切り上げられたのでクラウチに適当 に返事をしてトボトボと歩き出す。

『会話』という経験が普通の人と比べてあまりにも少ないギンは話を切り上げられた時点でもう何も言えなくなるのだ。

「……むう」

ぼやいても遅い。

一人で残念そうに首を振り、気持ちを切り換える。

とりあえずもう一度チェルシーを見てみるが、やはり猛烈に仕事をしていた。

クラウチとチェルシー以外にもオフィスには何人かがいるにはいるが、やっぱりクラウチ以外は何かしている。

面識も無いのに作業を邪魔してまで話し掛けれる程ギンは社交的と言うか図太い神経は持っていない。

ため息をついて諦めた。

再びオフィスを出て広場へ。

そのまま広場の中心で燦々と輝く水を噴き上げる噴水の近くまで歩き、再度広場を見渡す。

とりあえず広い。

そして気付いた。

オフィスのドアへと続く段数が数段しかない階段、もとい段差にはカーペットが敷かれていないと。

更にはこの広場の中心である噴水とその周りは少し窪んでおり、見渡しても五方向それぞれにある五色のカーペットの先がどこへどんな風に続いているかは見えない。

何気に凝った造りの広場である。

噴水の周りやいくつかあるベンチ、更には床にそのまま座って談笑している社員らしき人物は何人かいるが、談笑しているが故にギンがちよっと道をと話し掛けられる難易度ではない。

「ギン……!!」

ギンがどうしたものかと頭を悩ませていると、誰かが名前を呼んだ。

ギンはエミリアかと期待したかったが、少女の声とは絶対に呼べないものだ。たので誰が呼んだの確認する前に落胆。

ただ、自分の名前を知っている人物は誰なのか気になったので無視はしない。

呼ばれた方向を見てみると黒いボディのキャストが立っていた。長身のギンとほぼ同じくらいスラッと背が高く、フルフェイスのヘルメットの様な物を頭に被って顔が全く見えないこのキャストを確かにギンは知っている。

「……バスク？　なんでここに？」

バスク。

海底レリクスで会った漆黒のボディがいかつい男のキャストである。背が高く、フルフェイスのメットを被っているため素顔は不明。いや、キャストなのでそのメットが顔なのかもしれない。

ただメットの奥から鋭い眼光っぽいものは時たまチラリと見える。そして身のこなしから推察するに、かなりの実力者である。

そんな彼はたしかフリーの傭兵だと言っていたが、何故か今このリトルウィングにいた。

「それはこっちのセリフだ。どうしてお前がここにいる？　レリクスで消えたからかなり焦ったんだぞ」

「あー……、色々あってここに入ったんだ」

ギンの質問にバスクはこっちが訊きたいと逆に返してギンに近づく。

そういえばギンはバスクを置いて勝手にレリクスの奥へと入って別

れたきりであった。

ギンは頭を掻きながら色々あって、と言ってはぐらかした。
「……そうか、お前もここに入ったのか」

ギンは心の底で感謝の言葉をバスクに向かって叫ぶ。
声に出さなかったのは気恥ずかしさと、今ここで叫べただの変人
にしか見えないからである。

「……そうか、お前もここに入ったのか」

あつさり納得した。

しかもはぐらかした部分を完全にスルーしてである。
敢えて触れなかった、と言うべきか。

ギンは心の底で感謝の言葉をバスクに向かって叫ぶ。

声に出さなかったのは気恥ずかしさと、今ここで叫べただの変人
にしか見えないからである。

「改めて名乗ろう、俺はバスクだ。俺もレリクス救助活動を手伝
つてる際にクラウチから声を掛けられてな。入社までの経緯は問わ
ずと聞いていたからどんなヤツらがいるのかと思っていたが……ひ
どい状態ってワケでもなさそうだ。不安だとすれば、取り仕切って
いる筈のクラウチへの仕事への姿勢ぐらいか？ 何か理由はありそ
うだが……」

少しあったギンとの間を詰めて右手を差し出した。
つられてギンも右手を出し、ガツチリと握手をする。中々関係は良
好だ。

レリクスでの救助活動とは間違いなくエミリアとギンの為だろうが、
バスクはギンがどうなったのか知らないらしい。

クラウチが何かしてバスクや他の傭兵達に情報が回らない様にした
のだろうか。

ギンには分からないが、何か色々訊かれるよりはいいので良しとする。

握手が終わるとバスクはリトルウィングの様子をスラスラと語り、クラウチには何かあると言って顎に右手を添えた。

自分で色々と相手を観察して推察するあたり、以外と噂好きかもしれない。

「おっと、そんな詮索は余計だったな。俺達は雇われの傭兵よろしく、割り当てられた仕事をこなせばいい。一緒に仕事をする機会があるかもしれんが、その時はよろしく頼む」

一人で考えに耽^{ふけ}りそうになった瞬間にハッと我に帰り、ギンを見てよろしくと言う。

おう、そうギンも答えて軽く右手を上げた。
よろしく、というジェスチャーである。

ギンとしては入りたてのリトルウィングに知り合いがいるのは好都合だ。

バスクならエミリアと違い実力も伴っているだろうし、醸し出す雰囲気から何故か色々世話になりそうな気もする。なんとなく気も合う。

そして何より今、『居住区』がどこにあるかという最大の疑問にバスクなら訊けるし間違いなくしっかりと答えてくれるだろうからである。

「悪いバスク、一つ訊きたいん——」

バスクに居住区の場所を訊こうとした瞬間、ギンは何かを察知して後ろへ跳ぶ。

バスクも同様のものを感じたらしく、ギンとほぼ同時に後ろへ跳んでいた。

やはり実力者だ。

二人が跳んだ後直ぐに風切り音がして、二人が今までいた場所にセイバーが突き刺さった。

跳んでいなければ二人のうちどちらかの脇腹に刺さっていたのは間違いない。

ギンは苦笑いが漏れ、バスクはセイバーが飛んできた方を見た。

「……ひどい状態じゃねえ割には、スゲエもんが飛んできたぞ？」

「……うむ、俺も予想外だな」

ギンもバスク同様セイバーが飛んできた方向を見ると、エミリアではない少女が一人立っていた。

EP2…リトルウイング（後書き）

前話の半分以外の文字数ですが、これが今後のノーマルになると
思います。

前のが異常だったんです。

いくつかの変更点。

1、リトルウイングのオフィス。

ゲームのままじゃあまりにも人が少ないのと、いる人が全然何も
していないので、事務系の仕事をしている人を配置。

モブが増えたとも思ってください。

あとゲームよりもオフィスをもうちょい広くイメージしています、
私。

いや……ゲームのじゃ狭いし、機械少なすぎだし。

2、広場。

ゲームのままじゃやっぱり狭すぎる。

そもそもあの真ん中のワープポイントはゲームで何も説明ないし、
はゲームのギミックと考えれるので削除。よく知らないけど、グラ
ールにワープというテクノロジーは基本的に無いって事で。なんか
特殊な場所以外。

その代わりに広場を巨大化。なんとなく噴水を設置。ベンチも置い
てみた。

きっとあの広場的なところ、リトルウイングのエントランスも兼ねて
ると思うので小綺麗に。

ゲームではオフィスへの通路ってか段差を含め五本の通路がありま
したが、例のワープが無いので一本追加。カーペットの色は紫にし
ましょうかね。

行き先は勿論ゲームでのワープと同じ。

3、バスク。

あの顔がよく分からない。

分からないと思ったら分からない。

キャストのキャラクター製作で見てもよく分からない。

まず、目が分からない。

そして口が無い。

耳も無い。

後頭部からヒョロッてしたあれはなんだ？

全体的によく分からないのであればフルフェイスのヘルメットのな物にしようかなと。

飯食えないじゃん、口無いと。キャストだから充電かもしれないけど、『キャストに味覚は無い』って設定があるって事は飯食えるし食ってるって事だし。

てか何故ゲームに登場するキャストは男はガンダム的な見た目で女は普通に人が多いのか？

あれはメットでいいの？

『頭』ってパーツを保護する為のメットでいいの？
謎です。

以上が、今説明すべき変更点です。

その他は作中か説明されるか、ここでまた説明します。

疑問なんですけど、キャストって服じゃなくてパーツってゲームではなってますよね。要は服は着てなくて、ガンダムのあのパーツが体であり服としてお洒落さとか出してんですよね？

……チエルシーのは？

ムービーや戦闘中に歩く度にスカート靡いてるんですが。

あれはパーツを組み合わせた結果、人間の裸体が完成し、その上から服を着てるんですかね？

全体的に謎ですキャスト。

EP3: LOST civilization

「ほんっとーに！ すいませんでしたっ！」

リトルウイングのエントランスにある噴水の前で少女が深々と頭を下げる。そのうちそのまま膝を折って額を床に擦り付けるかもしれない程勢い良くだ。

頭を下げられた二人、ギンとバスクは困った様にお互いを見る。

そして取り敢えずバスクが促して少女の頭を上げさせた。

薄いピンクという派手な色の髪を頭の後ろで縛り上げ、逆立てた様な特徴的な髪型の少女。オレンジがかった眼は申し訳なさそうに未だ下を見ている。

年の頃はエミリアとだいたい同じか。

「……話を纏めるぞ。戦闘訓練でいつも自分が使っている武器ではないセイバー系でやってみたところ、とてつもなく悪い記録を叩き出してしまい、ショックだから終わった後も廊下を軽くセイバーを振って歩いていたらすっぽ抜けて飛んでいった。で、いいか？」

「……はい」

バスクが先ほど少女が話した『セイバーが飛んできた事件』の経緯を纏めて言い直す。

少女はただ気まずそうに頷く。

何とも言えない空気が漂っている。

セイバーが飛んでくるという戦慄を覚える様な出来事にこのエントランスにいた人達は一時騒然としたが、原因がこの少女だと分かる。と何故か全員納得顔をして終わってしまった。

この子はいつも何かをすっ飛ばしているのだろうか？

ギンは少女を色々と眺めてみる。

……特にこれと言って何も無い。

「……ボクは昔からおっちょこちょいなんです。今日は久々にうちに入った方が凄い人だって聞いたので、ボクも負けてられないなって……」

「戦鬪の幅を広げようとして、見事に失敗か」

ポツポツと少女が話し、直ぐに言いたい事が分かったバスクがサラリと言う。

少女はコクリと頷いた。

競争意識は立派だが、セイバーを投げてはいけない。そもそも、仮にも軍事会社に身を置く者が武器を手からすっぽ抜けて飛べずという事態が起こり得るのか。

本人も言う通りおっちょこちょいなのは間違いないが、度が行き過ぎている感も否めない。

ただギンは少女の別の言葉が気になった。

「ん？ 俺以外に今日誰が入ったのか？」

「……ギン、俺だ」

バスクが肩を竦めながら一言。

さっき俺の話を聞いていたか？

言葉にはしていないが、雰囲気のごとくそう言っている。

対してギンはあぁと納得して頷くだけ。雰囲気なんて知ったこっちゃない。

バスクから微妙に哀愁が漂う。

「ともかく、本当にすいませんでしたっ！」

この微妙な雰囲気払拭する為か、再度少女は深々と頭を下げる。

今回の一件は全面的に彼女が悪い。下手すれば怪我人が出ていたのだから。

しかし、運良くセイバーがすっ飛んだ先にいた二人は避けたのだ。なので謝られた二人はもう一度顔を見合せて意志疎通を試みる。

するとお互いに目が合ったからか、気持ちが繋がったらしい。二人して別にいいからともう一度頭を上げる様に言う。

少女は気まずそうに頭を上げた。

「そういえばまだ名前を言ってなかったな。俺はバスクだ」

「ギンだ。好きに呼んでくれ」

名前を知っていると知らないでは安心感が違う。

未だ固い少女にバスクは右手を差し出した。

ギンはそれを眺めるだけだったのだが、促されたので真似して右手を出す。

握手をした少女の手は硬かった。

努力の結晶と言えは聞こえは良いが、その手の持ち主が少女だけに複雑な気持ちになる。

「えっと、ボクはサンゴと言います。よろしくお願いします!」

名乗られたので少女も返す。

またもや深々とお辞儀をし、今度は直ぐに顔を上げた。

これで取り敢えず気まずい雰囲気は消えたか。

そこでハッとギンは気付く。エミリアを待たせていると。

「悪いな、俺は人を待たせてるから」

右手を上げて踵を返す。

結構なタイムロスをした。これは絶対怒ってる。

後ろで二人が何か言っているが、そんなもん焦りで耳に入っていない。

取り敢えず走って噴水前から目の前にたまたま続いていた緑のカーペットが敷かれた道まで行く。

……そこでまたもやハッとした。

「居住区ってどこだ!？」

思わず声が出た。

冷静になってみればギンは肝心の居住区の場所を知らない。

バスク達に訊けばよかったものを、焦ってそのまま走ってきてしまった。

今さら訊きに行くのも気が引ける。

慌てて周りを見渡すと、たまたま近くにいた一人の女性と目が合った。

「……見ない顔だな。という事は、久々の新入社員か。ふむ、漸くクラウチも動いたようだな」

目が合った女性がギンの方へ歩み寄り、フッフと笑って話し掛けてきた。

赤い服を着て、青みがかった黒髪の前髪が長くて片目が隠れた女性。ちよっと目付きが悪い。

焦って何がなんだかよく分からないギンは取り敢えず会釈する。

「私の名はクノー。リトルウィング所属の者だ。君にとっては先輩となるのだろう」

友好的と言うよりは、不敵で何か裏がありそうな笑みを携えてクノーが右手をギンに差し出した。

反射的にギンも自分の名前を言いながら右手を出して握手をする。
柔らかくて綺麗な肌をしていた。

「ここは入社まで経歴を問われない反面入社後の実績で全てを評価される完全な実力主義の会社だ。……腕に自信が無いなら早々に去った方がいい。自信があるのなら、好きにするといい」

不敵な笑みを顔にくっ付けたままクノーが言う。

勝手に話が進んでいるのでギンは完成に取り残されている。

「……ふふ、今のは軽い脅しのつもりだったんだが、全く動じていないところを見ると君は自信がある方なのだろうな。君が私と敵対しない限り、私は君の味方だ。いつでも、話し掛けてくれ」

動じていないと言うより取り残されているギンであるが、クノーは動じていないと判断したらしい。

今度はフフツと優しい微笑みと共に言う。

話の内容は入っていないが、ギンは何となくこっちの笑顔が彼女の本当の表情に思えた。

それはともかく、ギンは話し相手が見つかった事により、このチャンス逃すまいとクノーに訊ねる。

「エミリアがどこにいるか知らないか？」

「……？ エミリアなら居住区の前で誰か待っているぞ」

ギンの問い、かなり唐突である。

しかしクノーは動じない。

ああ、と少し間を置いて答えてくれた。

君を待っていたのか、とも。

だが、ギンにその答えでは残念ながら通じない。何故なら居住区の

場所を知らないからである。

「……その居住区の場所が分からなくて困っているんだ」

「この奥だが？」

本当に困った顔でギンが言う。

その肝心な所が分からないのでさっきから苦勞しているのだ。
対してクノーは何を言っているのかと呆れた顔で答える。

ギンは眼帯に隠されていない左目を丸くし、キョトンとした。

「悪い！　ありがとう！」

お礼もそこそこに、ギンは一気に駆け出す。

一瞬でトップスピードに到達したその足は自らの言葉を置き去りに
していく。

クノーはその速さに驚き一瞬固まったが、直ぐに復活してフフと笑
う。

久々の新入社員は中々面白い様だ。

走り去った奥を一度振り返り、エントランスの方へ歩いていった。

「ふぁー……ねむ」

大きなあくびをしてエミリア。

ここへ来て既に三十分は経った。もう待ちくたびれている。

「……あ、やっと来た！　ちょっと、遅いよ！」

緑のカーペットが敷かれた通路を全力で駆けてこっちへ走ってくるギンが見えた。

聞こえるかは分からないが文句を言わずにはいられない。腰に手を当てておもしろい文句をギンに言う。

エミリアの目の前で急停止したギンは少し肩を上下させて悪いと疲れた声で言う。

レリクスではどれだけ戦っても呼吸を乱さなかったギンだが、何故か今は激しく上下に動いている。

「ちゃっちゃと終わらせてあたしは眠りたいんだから、早く来てよね！」

ギンの上下する肩を見ながらエミリアがムスツと不機嫌めに言う。状態から、ギンは相当焦っていたのが分かるのでそれ以上のおとがめは無しにしてやった。

ギンの「おお」という弱い返事を聞くと、エミリアはクルリと後ろを向く。

エミリアの真後ろには巨大なドアがあり、彼女が一步踏み込むとシューッと空気が抜けた様な音を立てて左右に開いた。

エミリアの後ろでギンの驚嘆の音が響く。呼吸はもう整ったらしい。

「カッケー！」

「……事務所のと似たようなもんじゃん」

エミリアはため息をついた。自動ドアのどの辺りに惹かれるのか謎である。

チラリと後ろを振り向いてみると、ギンは居住区の入口を小さい子の様な好奇心に溢れた目で見ていた。

自動ドアなんてグーラル中にある。

いや、それどころか基本設備なので無い場所を探す方が難しい。
こんなリアクションをするのは文明を知らない未開の地の部族か小説上の狼少年くらいだ。

現在のグラールは極地であろうが海底であろうが調査が入っていない未開の地は無いし、生物学的に狼少年はあり得ない。

このギンという青年はいったいなんなのだろうか？

単純にこういう物が好きなだけなのか。

色々と疑問が浮かぶエミリアである。

浮かんでは消える疑問を一旦は叩き潰し、エミリアはギンを居住区の中と呼ぶ。

居住区は入口から少し入れれば事務所前の広場と同じように円形のエントランスになっており、そこからエレベーターで上のフロアへ上がって自分の部屋があるフロアへ行く仕様だ。

「おお……っ！ カッー」

「はいはい、分かったから騒ぐのは無し！」

暖かな印象を与える茶色の壁は木材製……っぽく見える居住区のエントランス。勿論の事ながら木材製ではない。

円形なのと木材製っぽい特徴的な壁以外はこれと言った特徴はないが、これもギンのストライクゾーンらしい。

ますますギンの好みが謎になるエミリアである。

テンションが上がり、またもや大声を出そうとするギンを無理矢理止めてエミリアはため息をつく。

疲労が無意味に積もる。

「……こつち来て。ええーと、あんたの部屋は……」

「おお……！」

エミリアがギンを呼んでエレベーターのドアの横にあるディスプレイ

レイの真ん中を押す。

するとディスプレイが光り、何かの文字が映し出された。エミリアが指で画面をスライドさせてギンの部屋を探す。

当たり前だが手慣れた様子の彼女の姿を見て、ギンは驚嘆の声を漏らした。

「見つけ。……うわっ、スツゴい良い部屋じゃん、ズルい！」

スライドさせていた画面を見ながらエミリアが不満そうに声を上げる。

ギンがエミリアの後ろから画面を覗くと、確かに画面には『Gin』という文字と何かの図面が出ていた。

良い部屋なのは分からない。

そもそもギンは間取り図なんて分からないのである。

「ズルいのか？」

「ズルいわよ！ 入り浸ってやる！」

図を見ても何も思わないギンにエミリアが何故か怒る。

理由が分からないギンはただ首を傾げて困るだけ。彼の価値観では壁と屋根があって雨風がしのげてちょっと暖かったら『良い住处』なのだ。

しかしそんなもん知らないエミリアの怒りは収まらない。彼女の部屋に対する基準はごくごく一般的である。

「……よく分からないが、入り浸っても別に俺はいいぞ？」

怒られる意味が分からないギンではあるが、エミリアが入り浸るのは構わない。

別にいいぞ、そう言う当たり前よと不満たっぷりな声で返された。

相当羨ましいらしい。

自分の部屋が如何に良いのか分かっていないギンを見てイライラするエミリア。単純に妬んでるだけである。

しかしこのままずっとここで言い合ってるわけにもいかず、話を切り上げた。

画面をタッチしてエレベーターの扉を開けた。

後ろで口笛吹いて喜んでるギンを引っ張って中に入る。既にデイスプレイで行くフロアは決めてあるのでエレベーターは二人が中に入ったのを感知すると勝手に閉まって上へと向かう。

「ロマンだ、ロマンを尋常じゃないくらい感じる……！」

「……あっそ」

静かに上へいくエレベーターの中でギンは楽しそうに独白。声が弾みに弾んでいる。

対してエミリアはこれ以上無いくらい冷めた顔をしてため息一つ。

エレベーターなんて当たり前に存在する設備であり、ロマンなんて微塵も無い。

自動ドアやエレベーターなど、ギンは普通の物にロマンを感じるのか。

エレベーターは指定したフロアに到着したらしく、音も無く止まってドアが開く。

エミリアは未だにロマンを感じて浸っているギンをやっぱり引っ張って外に出し、奥へと続く廊下を歩く。

左側にはたまに番号がふられた扉があり、これが部屋の入口らしい。更にエミリア達から見て右の壁に所々ある窓からはパルムの惑星が見え、中々綺麗だ。

エレベーターから廊下へ出てから数えて四つ目の扉でエミリアは止まる。

「はい、ここにアンタの手当てて」

扉のど真ん中を指差してエミリアが言う。

何がなんだか分からないが、ギンはエミリアが言う通りに指差しす場所に手を当てた。すると甲高い機械音がピーッと鳴り、鍵が回る音がする。

ギンの左目が光った。が、エミリアはもう慣れたらしく自分の言葉でギンの感動を遮る。

「掌紋認証で、オートロックだから覚えといてよ!」

エミリアは自分が喋るとギンは黙るという法則を発見したのだ。カッケーと煩いのは嫌なので、こういう時は法則を使って封殺に限る。

案の定ギンは開いた口を閉じ、出そうとした声が腹に戻って変な声とも音とも言えない呻き声を出した。

「……しょーもん?」

「アンタの掌が部屋の鍵だって事!」

今いち分かってないギンに向かってエミリアが分かり易く説明してやる。

するとギンは自分の掌を不思議そうに様々な角度から見つめ、更に拳を握ったり解いたり色々動かして何か確認し始めた。

そして一通り確認し終えたのか、再びエミリアの方を見る。

「いつの間に俺に鍵なんて埋め込んだんだ?」

「埋め込んでないわよ!」

真顔でギン。

本気で鍵が埋め込んであると思っているようだ。

さっきからエミリアはギンの言動に振り回されてばかりである。掌紋認証はそういう物騒な手術をするものではない。

ただ単に字面通り掌の紋で人を識別するのだけのものだ。

が、ギンはおそらくその字面が分かっている。

『掌紋』が掌を意味しているとは思っていないのだろう。

「ロマンで開くの！ 分かった！？」

「……おお、カッケーな！」

説明は面倒だし、何よりもムダそうだ。

という事でエミリアはギンの好きな『ロマン』で片付ける。するとギンはほほうと頷いて納得顔になった。

ロマンの何を以て扉が開くのかは謎であるが、本人が納得したのでもう良いのだ。

これ以上扉の前でグダグダする気は微塵も無い。

「ほら、早く入って！」

ギンの背中を押す。

扉で感動する様な奴が中を見たら大変だろうが、だからと言ってずっと外に居るのは嫌である。

エミリアはもうギンの止め方を把握しているので何とかなる気もあるのだ。

いきなりエミリアに背中に押されてギンは前にのめりになり、扉が目の前に迫る。が、ぶつかる前にオフィスのと同様に空気が抜ける様な音と共に扉は横へスライドした。

結果、ギンは何にもぶつからずに何とかバランスを取り直すことが出来た。

バランスを取り直したギンが顔を上げると、勿論の事ながら部屋

の中が目に入る。

居住区のエントランスと同じく木製っぽい壁にモノクロのタイル。部屋の入口から直ぐにキッチンとリビングが確認出来、奥にもまだ部屋がある。

ギンの後ろでエミリアのむくれた声がした。

「これ独り占め！？ 広っ！」

遂にはギンより前に出て、真っ先に部屋の中を確認するエミリア。ズルいズルいと喚く。幼女のように。

そんな彼女をギンは困った様に見つめて一言。

「独り占めじゃない、エミリアも一緒に使うだろ？」

「あー、まあそうだけど。……ってギン、あんたその言い方だと誤解を招くわよ？ あたしはもう慣れたけどさ」

サラッと誤解を招きそうな事を言うギンをエミリアが吐息混じりに注意する。

ギンは単純に『入り浸る』という先程のエミリアの言葉を踏まえての発言であるが、他者から聞くと色々とおかしい。

特に『一緒』という単語が際どい。

相手がエミリアでなければかなりの確率で別の意味に取られてしまうだろう。

エミリアの注意にギンは首を傾げ、毛ほども理解していない様に見える。

そんな彼を見てエミリアはそろそろ癖になりつつあるため息をして無理矢理頭を切り換える。

取り敢えずこの部屋にある物の使い方を叩き込まなければならないからだ。

「いい？ 今からあんたにこの部屋にある物全部の使い方を教えるから、しっかり覚えてよね！？」

「……よし、任せろ！」

エミリアの問い掛けにギンがノリノリで答える。

はつきり言って心許ない。なさすぎる。

だが、覚えてもらわなければいけない。生活の為に。

エミリアはかなり不安な心を叱咤しつつ、ギンに部屋の内装や部屋中の機器等の操作を教えていった。

「ま、基本的にはこんなトコかな？」

「……頭がパンクしそうだ」

エミリアは一通りの説明を終えて一息ついた。

意外にもギンの呑み込みは早く、取り敢えず普通に生活は出来そうである。

ただしやはりというか、複雑な機械類の操作は下手であった。

スイッチを押すだけの物はともかく、メールや電話にネット接続、その他諸々の機能がてんこ盛りの『ビジフォン』等はかなり苦戦しそうだ。これは仕事で必需品なので使えないとある意味致命的なのだが、そこはパートナーたるエミリアがカバーするしかないのかもしれない。

電子機器類の用途や操作方法、やってはいけない事等を必死に頭に詰め込んだギンは何時に無く険しい顔をする。

記憶しないといけない情報がギンの頭の容量をオーバーしている感じも否めず、仮にギンがキャストだったら頭から煙を吹いているか

もしれない。

「あとはテキストに試つてみるといいよ。その間、あたしは休んでるからさ」

使用方法をブツブツ暗唱しているギンを見ながらエミリアは笑う。ギンの様子を見るのが楽しかったり面白かったりするのではなく、休めるからだ。

分かったと暗唱しながら片手を上げるギン。それを見てエミリアは嬉々としてギンのベッドに飛び込んだ。

ギンはまだ触つてすらないベッド。一番乗りはエミリアである。

「……ふぁーあつ……。やば……ホントに眠くなつてきた……」

枕に顔を埋めてエミリア。

本当に微睡まどろんでいる。

疲労が溜まっていたのか、ただ単に怠け症なだけか。

ギンはそんなエミリアなんて目もくれずに暗唱。そしてエミリアの言った通りに実践を開始する。

取り敢えず目の前にある小型テレビのリモコン（エミリア談）を手取る。リモコンというのは名ばかりで、見た目はただの細くて薄っぺらい棒みたいな物であり、エミリア曰くこの棒の薄っぺらい面をタッチして操作するらしい。要はエレベーターの横でエミリアが触っていた画面と似たような物である。

実はあのディスプレイが気になっていたギンは一人ノリノリでリモコンを構えてぺらい面をタッチ。

が、肝心のテレビが無い。

ギンは周りを見回す。

エミリアはもう微睡みを通り越し寢息を立てていた。

ギンの部屋は大まかに分けて四つ。

今現在ギンとエミリアがいる所は寝室と書斎としての機能を持った場所である。

何気に広いベッドとビジフォンが置かれた、やっぱり広いカウンタ
ー。

壁には本棚として使える様にと一部窪んだ箇所がある。

その他ドレッサーや外に張り出した窓もあり、そこから夜景ならぬ宇宙景が展望出来る。……今は遠くにある小さな星しか見えないが。そして部屋の残り三つの部分であるが、入口から直ぐにあるリビングとそこに併設されたキッチンで一つ、バスルームで一つ、そして軍事会社だからか武器庫らしき納戸が一つ。
エミリアが嫉妬するのも理解出来る広さだ。

「……あっちか」

このスペース以外でテレビがあるとすればリビングしかないだろう。

ギンはリモコンを軽く指先で回しながら歩き出した。

寝室スペースから僅か三步でリビングへ。

家具も何も無い閑散としたリビングの奥の壁に結構大きなテレビが壁に張り付いていた。

因みに現在この部屋にある家具などはギンがエミリアと先程確認したところ、中々高そうなベッド（既にエミリアの植民地）と結構大きなテレビ（壁に張り付いているためギンは気付かず）、そして仕事で必需品のビジフォンと空調設備と食器だけであった。
要するに殆ど何も無い。

しかしギンはそんな事気にしない。

今彼の頭の中にあるのはこのテレビとリモコンの操作方法だけである。

ギンはしっかりとリモコンのぺらい面を見つめてタッチする。
するとぺらい面が光り、『ON』という文字の入った丸い箇所が画

面に映る。

ギンは高鳴る胸を抑えて静かにその箇所をタッチした。

『はい！ 皆さん、こんにちはーっ！ 今日私達【V's】のライブに来てくれて、ありがとーっ！ 今日のMCは私、ミコでー』

点いた画面に緑の長い髪をツインテールにした女の子が眩し過ぎる笑顔と共に映し出される。

思いの外音が大きく、ギンはビックリしてもう一度リモコンを触ってテレビを消した。

エミリアが起きたら大変である、という理由もある。

初めてのテレビは刺激が強過ぎた。

ギンは寝室スペースに戻ってリモコンをカウンターに置き、エミリアを見てみる。

……熟睡中であつた。

今のテレビの様に、思いの外騒がなくなる可能性も否めない。

熟睡中のエミリアを起こすのはまずいし、実践は止めて一度この居住区を探検しよう。

そうギンは思つて踵を返して寝室スペースから出ようとした。

が、後ろで急に『誰か』の気配が現れたのを感じてピタリと止まる。

『……待つて。ここなら……二人で話が出来そうだから……』

穏やかな女性の声が聞こえ、ギンは振り向く。

……誰もいない。

寝息を立ててるエミリア以外誰もいない。が、確かに自分とエミリア以外に誰かがいる気配はする。

ギンが周りをキョロキョロと見回していると、ふいにエミリアの体が光り出した。

ギンの左目が驚きで丸くなる。

「私はミカ。訳あってこの子に宿る意識のみの存在です」

エミリアの体から光りが放たれ、その中から女性が一人現れた。エミリアと同じ金の髪は長く腰まであり、胸元がザックリと開いた中々にセクシーなワンピースの様な民族衣装を身に纏った女性。

大胆な衣服の隙間から見える肌には所刺繍だろうか、何かが描かれていた。

そんな女性は穏やかな眼差しをギンに向け、微笑む。

「この姿も状態も、すでに失われた古の技術によるもの。失われた技術を旧文明のものと言うのなら、私は『旧文明人』となりますね。途方もない過去にこの星を生きていた、原初の文明を持ちうる人類それが、私達でした」

胸元に手を当てて自分が何なのか説明する。

学の無いギンはまた知らない言葉が出てきたので頭痛がしてきた。ミカの存在やその他色々つまみ所はあるのだが、彼はそんなものを華麗に無視。曰く、『旧』ってここではどういう意味なのか、である。字面そのままなのだが、『文明』という言葉が続いているのでギンを混乱させるのだ。『古代文明』という事なのか、と。

「……エミリアは？」

「疲れていたのでしょうね、今は浅い睡眠状態にあります。心配せずとも、すぐに目を覚ましますよ」

『旧』か『古代』か判然としないギンであるが、取り敢えず不思議な現象が起きているエミリアについて訪ねる。
体が光るなんて普通はあり得ない。

……例外はあるが。

「私はエミリアが安らいでいるほんの僅かな時間だけ、この身体をお借りしているだけです」

穏やかな目でミカは一度エミリアを振り返り、もう一度ギンを見る。

金の髪がフワリと腰を波打ち、優雅に輝いた。

ギンはミカを『気配』で探る。

……実体は確かに無い。半実体ですら無い。

通常あり得ない『気配』だけがそこに在る』不可思議な感覚。

おそらく彼女を知覚し、触れる事の出来る者はほばいない。何か特殊な縁^{えにし}が在るか、特別感覚が鋭いかのどちらかだろう。

成程確かに『訳あり』である。

ギンは無意識にヒュウと口笛を吹いた。

「この些細な時間で構いません……。どうか、私の話を聞いてください」

ミカがギンの様子を見て、話し出した。

ギンの『探り』が終わるのをわざわざ待っていたらしい。

『探り』という行為はあまり良いイメージを相手に与えない。自らの気配を相手に当て、まるで吟味するかの様なそれはやられる側からしたら気持ちの良いものではないからだ。

故にバレない様にギンは色々と工夫していたのだが、ミカは感付いていた様である。

中々お目にかからない存在だったので少々入れ過ぎたらしい。

ともかく、中々に失礼な行為をわざわざ待ってもらっていたギン。断る理由も無いのでミカの問いかけに頷いた。

「ありがとうございます。……この時代の背景などは、エミリアの記憶から把握させてもらいました。3年前、グーラル太陽系を襲った危機。……『SEED』の襲来。……それは、私達の時代にも起こった事なのです」

スーッと床を滑る様に動き、ギンに近付き胸に手を当て、目を瞑って静かにミカが語り出す。

『SEED事変』。

3年前にグーラル全土での死者1千万人以上も出した未曾有の天災である。

これによってグーラルが負った傷は深く、現在のデフレや資源枯渇問題などが起きた原因でもある。

「遙か昔、旧文明が栄えていた時代。私達は突如襲来したSEEDにより滅亡の危機へと陥りました。長い長い戦い……。私達は遂にSEEDの元凶である『ダーク・ファルス』の封印に成功しました。しかしその頃にはすでに三惑星の大地はSEEDに汚染されており、回復は不可能な状態でした。……そして、旧文明人の肉体もまた、同じようにSEEDに汚染されていたのです」

静かに、丁寧ミカは語る。

が、聞き手のギンに問題があった。

そう、この男には学が無いのである。

「このままでは星も人も滅亡するのは時間の問題でした。……そこで旧文明人は賭けに出ました。大いなる時を越える『復活計画』を……実行に移したのです。まず、SEEDに対する強力な浄化をこのグーラル全てに対して行い三惑星を甦えらせ、次に新たな『ヒト』の素体を造りあげ、それを大地に放ちました。そして、旧文明人は……汚染された自らの肉体を棄て、精神だけの存在となり、永い眠

りについたので。そう……新たに造り出した『ヒト』が高度な文明を築き上げたとき、『その身体を奪い、復活する』ときまで。計画は実行に移され、造り出された『ヒト』達は高度な発展を遂げていきました。旧文明人の精神が眠る場所への……繋げてはならない道が開くことが出来てしまうほどに……」

顔をしかめてミカが言う。

気に食わない計画、顔でそう言っていると誰でも分かる。

……のだが、ギンに通じているかどうかは怪しい。

何せ少し眉間に皺が寄り、顎に手を当てている。

完全に呑み込めていない。

「……もうお分かりだと思います。旧文明人によって生み出された『ヒト』とは、『ヒューマン』のこと。今、このグラールは……旧文明人の生み出した罠に狙われているのです」

瞑っていた目を開けてミカがギンを見据える。

対してギンは難しそうな顔をして何事かを考えている様に見える。

というのは見かけだけで、実際は単純にミカの話した内容を頭の中で必死に噛み砕いているだけだ。

元々人相が悪いのでその表情が様になり、考えている様に見えるだけ。今は得である。

「突拍子もない話、とお思いでしょう。ですが、いずれも事実なのです。……どうか、この忌まわしい計画を阻止するために手を貸していただけないでしょうか？」

お願いします、とミカがギンに頭を下げる。

ギンはそれを見て漸く気難しい顔から戻る。

「この子は……心を閉ざしきっていて私の声を認識してくれないのです」

ミカは再度エミリアの方を向き、悲しい顔で呟く。
しかし『心を閉ざす』など、普段の彼女を見てみると微塵も感じない。

いつもエミリアのテンションは周りよりも高めである。
が、ギンはふむと頷いた。

「自分自身にも閉じきるとは、ある意味恐えな。騙すのは上手いと思ってたが、ここまでくれば病気だ。……俺も他人の事は言えねえが」

ギンはクックツと今までに無い笑い声を上げた。

もうここに先程までいた機械に右往左往するギンはいない。
ある意味『本物』のギンがいるのだ。

ミカがエミリアからゆっくりとギンの方に視線を向ける。
ギンはカウンターの前にあった椅子にちょうど勢いよく座ったところであり、長く、肩の後ろで束ねた白髪が跳ねてカウンターに当たって細い音を立てた。

「……どうして阻止するんだ？」

静かな、しかし鋭い声音でギンが訊ねる。

時間を掛けてゆっくりと噛み砕いたのでギンは一応ながら頭の中にミカの話した内容が入っている。

……詳しい事は分かっていないが。

ミカはギンの問いに何とも言えない微妙な顔をし、間を置いて答える。

「……確かに私は旧文明人ですが、現代への回帰を望んではいません。私達は、滅ぶべくして滅んだ。世界は次の世代に任せるべきなのです」

答えた後の顔はスッキリとしたものになっている。
本音であろう。

更にミカはギンの目を真っ直ぐ見据えて続けた。

「……それに、貴方にとってはすでに私の存在は他人事ではないのです。なぜ、縁の無い筈の私と貴方が話す事が出来るのでしょうか……？　そして、あのレリクスで自律起動兵器に襲われたのは本当に夢だったのでしょうか……？　……貴方は、生きているのでしょうか？」

真っ直ぐとギンを見つめてミカがとんでもない事を言う。
常人ならば焦るところであろう。

当たり前だ。自己の存在を否定されているのだから。

が、この青年は違った。

ミカの問いかけにカラカラと笑い、ミカを失礼にも指差した。

「良い質問だ。……答えは『NO』、とっくに死んでるだ。そうだろう？」

予想外のギンの反応にミカは驚く。

しかし直ぐにギンの逆質問にはしっかりと答えられた。

「……はい。貴方の肉体は、自律起動兵器に碎かれ、一度は完全なる死を迎えました。そのとき、エミリアの強い願いによって発現した私のプログラムが貴方の身体を再構築しているのです。こうして話している、今も……」

ミカの答えにギンはほらと満足そうに笑う。
現実を逃避している訳ではない。真っ正面から受け止めて、それでも特に何も思っていない。

普通ならその事実を知って錯乱するだろう。自分の死など認めたくないもだからだ。が、ギンは最初から分かっている、認めていて、何も思わない。ある意味一番狂っている。

「……ふぁ……」

「そろそろこの子が目を覚まします。詳しくはまたいずれ……」

エミリアが寝返りをうち、ギンの方を向く。

少し顔をしかめており、ぐっすり寝てるとは言い難い。

ミカはそんな彼女の様子を見て、少し焦った面持ちで面白そうに自分の『復活』した体を眺めるギンに言う。

ギンが自分の体を眺めるのを止めてミカの方を向くと、ちょうど彼女の体は光に包まれて消えたところであった。

「……ふぁ、あつ。んー……ちよつと寝ちゃった、かな？」

エミリアが起きた。

ムクリと上半身を起こし、寝惚け眼を両手で擦ってアクビを一つ。

ギンはジッとエミリアを見つめ、試しにと『探り』を入れてみた。少し。……ほんの少しだけミカの気配がした。

本当にエミリアの『中』にいるらしい。

「……ん？ あのださ、なんでこっち見つめてるの？」

ギンの熱い視線にエミリアは気が付き、首を傾げる。

ギンとしてはまさか『探り』を入れてたなんて失礼な事も言えない。

かと言ってミカが、なんて言って良いのかも分からない。
何かで誤魔化さなければいけないので、ギンは頭をフル回転させて考える。

「寝顔、可愛くなって思ってたな」

「ちよっ……！ 寝てるのに気付いてたんなら起こしてよ！ あー、恥ずかし……」

思い付いた言い訳は恥ずかしかった。

しかし一度思い付いたらもうこれしか頭に浮かばない。言うしかないのだ。

ギンは頬を掻き、少し照れながらエミリアに答える。

それを聞いたエミリアも顔を赤くした。

彼女も照れてしまい、火照った顔を手で扇ぐ。

「……まあいいや。で、使い方分かった？」

「……」

「あ、やっぱり？」

エミリアの問いかけにギンの表情が一気に曇る。

一応理由はあるのだが、それをどう説明したらいいのか分からない。

エミリアはギンの表情で直ぐに悟る。

やっぱりダメだったかと。

自分から提案したのだが、よくよく考えてみれば『ロマン』で全て片付けてしまうギンが一人で機器類の操作など出来る筈がない。

見た感じ何も壊していないだけマシである。

「うーん、じゃあまああたしが後で教えてあげる。……それよりも、ちよっと着いてきて。あ、ビジフォン持ってきてよ！」

エミリアがベッドから立ち上がる。

背伸びしながらギンを呼び、部屋を出るからと言う。
そして椅子に座っていたギンが立ち上がると思い出した様にカウンターに設置されている黒い機械を指差した。

『ビジフォン』。

カウンターにはぼ埋め込まれた様になっているモニターの事だ。

エミリア曰く仕事での必需品。様々な機能を備えたコンピューター
の一種であるらしい。

故にエミリアは持ってきてと言ったのだろう。

……だがしかしこの形状、どう見ても据え置き型である。

カウンターと合体している様にしか見えないこれを持ち運んで問題
無いのか？

「……抜くのか、これを？」

「うっわ……そう来たか……」

カウンターに埋め込まれて光っている黒いそれを見ながらギンが
エミリアに訊ね、エミリアはため息をつく。

この、ギンの珍発言にエミリアのため息というのが二人のやり取り
のデフォルトラしい。

「……よく見てよ。隣に小っちゃいのあるでしょ？ それを手首に
巻くの！」

エミリアの声を聞いてギンはビジフォンの横を見る。

確かに何か、やっぱり薄っぺらい物が置かれている。

真ん中には小さいがやはり何かモニターらしき物があり、それ以外
はベルトか。

ちょうど腕時計と似た構造をしている。

ギンはその腕時計みたいなミニビジフォン（仮称）を手を持ち、

エミリアが言っていた通りに手首に……装着しなかった。

「エミリア」

「ん？」

「これを着けるのは俺の美的感覚に反するんだが」

「……どの口がそんな贅沢な事言うのよ!？」

ベルトの片側だけ持たれてブラインとしているビジフォンを指差してギン。

それを聞いてエミリアが憤慨する。

確かにこのビジフォンはお洒落とは口が裂けても言えない。

黒くて無骨、形も普通の四角形。

一応もつとカラフルで可愛いものやスタイリッシュなデザインのものもあるのだが、それは値が張る。

故にデフォルトであるただの黒い四角形。

至急されているだけマシだと思え。ビジフォンは一家に一台的な物ではあるが、そこそこ高いのだから。

エミリアはそう怒りながら自分の右腕の袖を捲る。

色白の細腕に対して明らかにおかしい真っ黒のビジフォンが装着されていた。

ピンクを基調とした暖色系の服も相まって、浮いている度合いが半端じゃない。

「あたしだって我慢してんのよ! だいたい、あんた黒いんだから別に変じゃないし!」

エミリアの本音である。

ビジフォンのこのデザインはどう考えても装着者対象に女性を入れていない。

エミリアだって女の子なのだ。お洒落に興味はある。

文句を言いたいのはあたし。

エミリアの主張を聞いてギンはビジフォンを眺め、次に自分の黒が基調の服装を見つめ、更にエミリアを見て、最後にビジフォンをもう一度見る。

「……そうだな、エミリアよりは似合うか」

「似合っていないって自覚してるから、わざわざ言うの止めてくれない?」

自分より下に誰かがいれば安心するのがヒトである。

ギンはフツと笑って手首にビジフォンを装着した。

笑われたエミリアは気持ち良くない。

ムツとして捲っていた袖を戻し、拗ねた様に口を尖らせた。

自覚してるからこそ、指摘されるのは嫌なのだ。当たり前であるが。

「……今から船があるところまで行くから、着いてきて」

エミリアの声が不機嫌である。

拗ねたらしい。

言葉を言ったと同時に早足で歩き出す。

ギンはその子供っぽいエミリアの反応にクツクと笑いながら、その背中を追い掛けた。

「これが仕事先に向かう船。社用だから大事に扱ってね」

居住区から広場へと出て紫色のカーペットが敷かれた道を歩いて

いくと、その先は三つに分かれていた。

一つがクラッド6内部にあるリトルウイングのスペースとは違う場所へ続く道。

主にリトルウイングへの依頼客が使うらしい。クラッド6の目玉であるリゾート地区などには軍事会社所属の者が行く意味が無いからである。

強いて言えばブランド物の服や雑貨を買いに行く場合のみだ。

もう一つが訓練所。

おそらくサンゴが先程セイバーを振り回しながら通った道である。

そして最後に社用の船がズラリと並んだターミナルである。

ズラリと大小様々な船が並ぶその異様な景色にギンはポカンと突っ立って動かない。

いつもの様に『カッター』とも叫ばない。

完全に吞まれていた。

「中に入るから着いてきて」

大口開けて呆けているギンにエミリアが声を掛ける。

届くか心配だったが、ちゃんと後から着いてきているので言葉は届いているらしい。

エミリアの乗り込んだ船は銀色の機体で、大きさはここに並ぶ中では平均的である。

社用だからか機体の側面には『リトルウイング』という文字とマークが入っているが、マークのデザイン故かあまり目立っていない。ただのお洒落にしか見えないのは広告してどうなのだろうか。

中は小綺麗に整理されており、バスルーム等に加えて一つだが個室もある。

操縦室には椅子が四つ。

どうやら四人乗りらしい。

「はい、ここにビジフォン当てて」

物珍しげに周りを眺めるギンに、エミリアが自分の前にある操縦席の機械を指差しながら言う。

やはりここにもモニターみたいな物が埋め込まれており、それが船の操作の中枢を担っているらしい。

その他色々とボタンだのレバーだのあるが、触ると怒られるのだろう。

ギンは何も言わずに自分のビジフォンの平らな面をモニターに当てる。

するとモニターが光りだし、何かを読み込み始めた。

ビックリするギンを他所にモニターは何かを読み込み終え、画面に『登録完了』の文字が現れた。

「これであんたもこの船使える様になったからね。まあ詳しくは、後でチェルシーから聞けると思う」

モニターを見ながらエミリア。

社員によって使う船は違い、この船はエミリアとギン用である。

正確にはクラウドも使うのだが、あんなだから殆どこれに乗らないのだ。

まあ、ギンも船に登録も完了したところで操縦は出来なさそうなので一人では乗らないし使わないだろうが。

しかし説明は一応やっておく。

意外にも直ぐ覚えるかもしれないからだ。

「――つまり、基本現場へ向かうときはこのシップを使って移動するってわけ。分かった？」

「……それとなく」

説明してみたが、やはりダメだった。

エミリアの説明を聞いた後、ギンは渋い顔をして首を横に振り、肩を竦める。

『ロマン』だのなんだのと言って、こういう宇宙船なども好きそうだが、残念ながら自分でどうこう出来るまでにはかなりの時間が掛かりそうである。

やっぱりムダだった説明をしたエミリアもムダに疲れてため息。ギンに会ってからため息の回数が加速度的に増えている。

「そういえばエミリア、『ミカ』って分かるか？」

「……え？ ミカ？ 何よそれ……」

ため息によって微妙な空気の静寂が漂い始めたちようどその時に、ギンがふと訊ねる。

自身でミカに気付かないのなら、こっちから振ったら気付くかもしれないからだ。

しかしそんなギンの試みはムダに終わった。

エミリアは『ミカ』と聞いても何も心当たりが無いらしく、首を傾げて疑問符をギンの方へと飛ばすだけ。

「いや、その……旧文明の人なんだけどな……」

「は？ 旧文明人？ そんなのとっくに滅びてるとか言われてんじやん」

ギンの説明は歯切れが悪い。

それもその筈だ。ギンはよく考えればミカの事など何も知らない。命の恩人、女性、旧文明人の三つしか知らないのである。

野望について話そうとしても、ミカ自身「突拍子もない話」と言い放っていたものである。ギンが話したところで意味は無いだろう。

「……って、ギン？　どしたの？　さっきからあたしのおでこばかりジロジロ見てるけど……何か付いてる？」

カム・オン、ミカ。

エミリアの中にいるのなら空気を察して出てきてくれ。

ギンがそう願いながら必死にエミリアの額を見つめる。

穴が空くんじゃないかと思うくらい必死の目だ。

しかし悲しいかな、ギンは右目に眼帯を当てているのでどれだけ必死に見つめても効果は一般人の半分なのである。

……そもそもこれに意味など無いが。

見つめられるエミリアにとっては何故そんなに熱い視線を送ってくるのか非常に気になるところである。

寝ていた時に何かがかくっ付いたのか。

そう思って手を当ててみるが何も無い。

「いや、あのな、エミリアの中に宿ってるんだ……。旧文明人が」

意を決して言うてみる。

頭が変な奴だと思われも良い。取り敢えず言うてみないと始まらないからだ。

それに元々ギンの頭なんて『正常』とはお世辞でも言えないスカスカなものである。

「旧文明の人が……あたしに宿ってる？」

ギンの言葉にエミリアが目丸くした

自分の胸に手を当てて。

ギンが真顔も真顔で頷く。

エミリア本人は気付いていなくても事実なのだ、頷くしかない。

「そんなわけないじゃん。それならなんであたしが気付かないのよ」

アハハと笑って一蹴するエミリア。

当たり前のリアクションだ。

ギンもギンで予想はしていたのだろう。特にそれ以降は何も言わずに笑うエミリアを見るだけ。

『中』にいるミカはどう思っているのか分からない。分からないが、これ以上の追及は無理である。

「あー、もー！　ヘンな出来事はあたしとあんたのレリクス体験記だけでじゅうぶーん！　きっとアレもソレも全部夢よ、夢！　レリクスでの事思い出すぐらいなら仕事をしたほうが百倍マシ！」

ギンが変な話を振ってしまったからか、エミリアの頭の中に海底レリクスでの嫌な現実ゆめがフラッシュバックする。

頭を振って彼方へ飛ばし、敢えて強くギンに言った。

仕事をレリクス体験記との引き合いに出す辺り、やっぱり仕事も嫌らしいが。

ギンは悪かったとエミリアに謝り、心の中でミカにも謝った。

ミカの宿主はエミリア。

彼女の願いを叶える叶えないの鍵もエミリア。

やはりエミリアの心の壁には少しずつ穴を穿っていく方法が一番の近道か。

命の恩人に借りを返そうとしても中々どうしても上手く行かないものである。

「ああっと、そうだ。仕事で思い出した。あたしのカード、読み込んでね」

フラッシュバックした光景を彼方へぶっ飛ばし、一息ついたエミ

リアがポンと手を打った。

何かと首を傾げるギンの前でエミリアは懷に手を突っ込み、何かを探し始める。

ちよっとして、あったあったとホッとした感じの声と共にエミリアは黒っぽいカードをギンに渡した。

表には社名とエミリアの名前、そしてエミリアの顔写真が入っているそれは何のへんてつも無いカードである。

敢えて言うならば、この写真の中のエミリアは不機嫌そうである。

「……って、あんたに渡しても分からないか。ちよっとビジフォン出して」

カードを受け取ってじっくりそれを眺めるギンを見てエミリアが苦笑する。

この青年には色々と欠けた部分があるのを忘れていたのだ。そう、こいつはこのご時世なのに機械類はほぼ全てダメだという『生きた化石』なのである。

エミリアはギンにビジフォンを出す様に促し、ギンが言われた通り袖を捲ったところにカードを押し当てる。

先程の船の登録と同様に、しかし今度はビジフォンがカードを読み込み始めた。

ギンが不思議そうに眺めている中、すぐにエミリアはカードを当てるのを止めて懷に戻してしまふ。

「これでよし、っと。あんたのビジフォンの中にあたしのデータ入れといたからね。電話番号とか、アドレスとか。……って言っても分からないか」

「まったくだ」

今自分が何をしたのか教えてあげるエミリアだが、すぐにそれが

無意味だという事に気が付いた。

案の定ギンは分かっていないらしい。

『アドレス』という言葉が通じないのはある意味凄いとエミリアは心の中で思った。

「あ、言っとくけど、この会社ではあたしのほうが先輩なんだからきちんと、敬うようにね」

人差し指をピンと立ててエミリア。

否、エミリア先輩である。

いきなりのその発言にキョトンとするギンだが、これはすぐに呑み込めたらしい。
頷いて一言。

「はい、分かりました」

「うわっ、ダメだ！　なんか気持ち悪い！　……ごめんごめん、今の冗談！　今まで通りの感じでお願い。あたしも、そのほうが話しやすいし」

ちゃんと言われた通り敬って敬語である。

が、それを聞いた途端にエミリアの顔が引き吊り、冗談だからと言って止める。ギンは自分で言ったのにと不思議がるが、使わなくていいのなら使わないので敬語を止めた。

しかし上っ面は不思議がっているギンであるが、実は彼は敬語がちゃんと使えないので内心は少しホッとしている。

自覚はしていても、やはり自分の学の無さが露呈するのは嫌なのだ。

「はー……それにしても、今日は色々な事が一気にありすぎて、疲れたあ。……初めての仕事でしょ？　いきなり事件に巻き込まれちゃうし、ヘンな夢は見るし……」

人知れずホッとしているギンの横でエミリアも息をつく。

彼女にとって今日は色々な意味で忘れられない一日となったからである。

人生初の仕事でいきなり事件に巻き込まれるなんてフィクションみたいで現実味があまり無い。

オマケに最凶に嫌な夢まで見たのだから、ホッと息をつきたくものである。

「……うん。細かい事はいいや。とにかく、あたしもあんたも無事だった、って事が重要だもんね」

頭を振って再び頭を切り換える。

エミリアは横で船の中にある機器類を興味津々といった感じで眺めているギンを見た。

今日あった事は何も悪い事ばかりではない。

「……で、さ。あの、あのときの事なんだけど。えっと、ええとお……なんて言えいいのかね」

エミリアは照れて歯切れが悪いながらもギンに声を掛けた。

掛けたが、今から改めて言おうとしている言葉を思うと直視出来ない。

なんだ、そう言ってエミリアの方を向くギン。うなじ辺りで纏めた長い白髪が束になって揺れる。

そこそこ美容を気に掛けてるエミリアから見ても綺麗な髪である

「その……あんたがいなかったらあたしはきつと、レリクスの中にずっと取り残されていたと思う」

呼んだのにいつまでも直視しないわけにはいかない。

顔を上げ、照れを心の底に押し込んでギンの左目を見据えて、辿々しいが言葉を紡ぐ。

「それに、何よりもあたしの言う事、信じてくれたし……。……。まあ、あれは夢だけどさ。でも……。夢でも、嬉しかったかな……。」

真っ直ぐギンを見てエミリア。

最後は恥ずかしげに頬を掻き、アハハと照れ笑いして目を反らしてしまったが。

対してギンはまさかそんな事を言われるなんて思っていなかったからか、切れ長の左目がいつになく丸くなる。返事なんて気の利いたものは出来ない。

照れて斜め上の方を見ていたエミリアが、いつまで経っても何も無いギンを不審に思っただけと前を見る。

「……。ちよつと！ あんまりキョトンとしないでよ。言ってるあたしも恥ずかしいんだから……。」

無反応のギンにエミリアが堪らず声を上げる。

ビクビクし過ぎだと。

自分は結構お礼は言う方だと思っていたのだが、違うのか？

ギンのあまりにもな反応にエミリアは自問する。

エミリアの声でギンは「おお」と気の抜けた声を喉から出して復活。直ぐに無反応で悪かったとエミリアに謝る。

……。悪戯を思い付いた幼児の様な顔をして。

「……で、俺が信じたからなん——」

「ダメダメ、ストープ！ あたしの話ばかりでズルいから、あんなの事も色々教えてよ！」

「――グッエ!？」

無反応だったが話はしつかりと聞いていたギン。

ニヤニヤと笑ってエミリアを茶化す。

エミリアは顔を真っ赤にして両手を振り、ギンを止めようと突進。思いつきりギンの胸に体を当てて無理矢理ギンの言葉を腹の底へ叩き戻す。

ギンの口から変な音が漏れた。

「なんてったって、あたし達は『パートナー』なんだからね! 教えなさいよ?」

胸に突撃をくらったギンが噎せる中、エミリアは突撃を決めたギンの胸の中から顔を見上げ、ニカッと屈託なく笑った。

エミリアにとっては散々な一日だったかもしれないが、最後は笑顔で締めたのである。

EP3: LOST civilization (後書き)

（人物紹介・用語解説）

サンゴ・コーラル。

ヒューマン、十六歳、女性。

今作オリジナルキャラ。

ピンクの派手な色の髪を後頭部で縛り上げ、俗に言うパイナップルヘアの女の子。

一人称は『ボク』。

着ている服はニューデイズの民族衣装。しかしパルム出身。

素直で純情なピュアガールで、果てしなくドジ。

物をどこかに置いたままにしておき紛失するのが日常茶飯事だったり、何度もカップを倒したりするため彼女専用の絶対に倒れないマグカップ（磁力で浮遊）が社内カフェに置いてあったりする。

本人もコンプレックスにしており、治そうと躍起になってるが治る気配は無い。歳が近く女の子同士のエミリアと仲良くなりたいと願っているが、怠け病で滅多に部屋から出ないエミリアとは未だに接点が無い。

まだまだ若いのに実力至上主義のリトルウィング所属いるので実力はそれ相応に高い。

得物を持てばスイッチが入ってドジが消える不思議な体質。

得意武器は鞭。非常に独創的な使い方をし、打撃ではなく縛り、吊るし、締め上げるDS戦法が得意。

モデルは『H×H』のマチ。

ビジフォン。

グラールでの生活では必須の機械。

平たく言えば薄っぺらい高機能パソコンである。

基本的にはカウンターやテーブルに殆ど埋め込まれた形でセットさ

れており、直接画面をタッチしても使えるが基本は映し出される立体映像を触って操作する。

親機と子機があり、子機は外用で殆どスマホと同じである。ただし立体映像でのタッチ操作が基本。

要領は小さめだが立体映像による電話も可能。

子機は腕時計型以外にも色々な型が存在し、デザイン性が優れる物程値段が高い。また、同様に親機も色々ある。

あけましておめでとうございます。
神威です。

一応色々独自の改変をしてみました。

ビジフォンはその筆頭ですね。

長くなっちゃいましたが、これは未だに私がどこで切ればいいのか掴めてないからでございます。すいません。

頑張ります。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3410x/>

Great Wing

2012年1月10日01時52分発行